

特257

670

茶
醉
集



始



特 257
675



徐家
解
集



序

いやしくも歌よまむほどの人のおほくはかの紀卿の定議を服膺し自ら信ずるご共に人にも説き及すが常なるが事實の件はざるがおほきも亦常なるに似たり然るに身を實業界におき歌人を標榜せずして却て専門家を凌ぐの概ある茶醉木原君の如きは稀に見るの一人ごもいふべし君は若年にして帝室に奉仕し壯にして事業界に轉じ現に日進月歩の科學的事業の普及に盡瘁し或は東北に或は西南に巡遊して殆席温まるに暇なきその間に於て所謂心に思ふ事を見きくものに就て言ひ出せる歌は毎に征衣の袖に充ち中には見るものをして感賞に堪へざらしむるもの尠しとせずまして君國を思

ふ精神より親に盡し友を愛し妻子に對する感懷に至りては
今更贅辯を費すの要を見ず君は天資酒を嗜まず茶醉と號し
て其の性格を表すと雖多技多能にして時機によりては酒仙
を瞠若たらしむるの妙技を演ずる事敢て珍とすに足らず
斯の如きは歌集を繙くに必しも其の要なきが如くなれど又
君を識る一斑たるを失はず集なるにあたりて平素思ふこと
ろを序す

昭和三戊辰六月二十日

御歌所寄人 千葉胤明

しるす

緒言

宇宙の間に生あるもの禽獸草木の末に至るまで務なきはあ
らじ況や萬物の靈長たる人間に於てをや勉めざるべからず
勵まざるべからず左ればこて起るより寝るまで働き續けら
るゝものにあらず其の間神心を慰め志氣を養ふに足る何物
かなかるべからず即書畫圍碁將碁球戯歌舞音樂詩歌酒煙草
等千差萬別ありと雖多くは耽り易く溺れ勝なるのみならず
相手を撰み時間を費し又場所を要する等の事ありて動もす
れば其の本業を防ぐるの虞なしとせず獨り和歌は唯五感に
觸れたる森羅萬象に對し其の感想を率直に言へば足れり古
今集の序にも力を用ゐずして天地を動かし鬼神を泣かしむ

二
とありて其の徳の宏大なるを想ひ之を以て己れの趣味とせり然れども理論と實際とは雲泥の差ありて一首の吟詠にも感想の百分一も言ひあらはず事の至難なると同時に凡そ娛樂の何物にも出来あり不出来ありて娛樂の總てが必ず娛樂にあらざる事も併せ悟る事を得たれば他技に涉らず一意専心斯道に志してより喜怒哀樂に處して己を慰め獨を慎み就中社界の陣頭に立ち至誠一貫惡戰苦闘を續けて直進し人道に横はる荆棘を刈除する所感の一端を詠し得たる時の痛快は眞に苦を樂に難を易に光風霽月の樂地にあるの感あらしめ更に進みて不撓の勇氣を涵養するに足るものあるを直覺す其の直覺たるや單に自己一身に止りて彼の歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは大株主た

るを失はずして天地はをろか毛髮一本の微も感動せしめ難きは言を俟たずと雖苦樂の境に立ちての一吟は取るに足らざる腰折と雖正に心機一轉の徳ありと信じ以て生涯の好侶伴とし凡調の愚歌を集輯刊行して謄寫に代ゆるもの也

昭和三年戊辰六月

茶 醉 木 原 猷 胤 識

茶醉集



教育勅語を拜讀して詠めるうちに

忠

事しあらばささげ奉らむ國の爲め鍛へし此身練りたましひ

孝

身ををさめ家をとゝのへ朝夕に親のこゝろをやすめてしがな

忠孝一致

たらちねの親につくすも大君につかへまつるもみちは一すぢ

億兆一心

天津日を仰ぐがごとく人と共に一つこゝろに御代につくさむ

國體

君と臣のたゞしき道をひとすちにふみたがへざる國はすめ國

兄弟

伸びちぢみありとはいへど親みてはなれざらなむ指の如くに

夫婦

この脊子にこの妻ありといはれてむ睦みあひつゝ家に盡して

朋友

まごころの底の底までうちあけて力あはせんともぞうれしき

恭

へりくだる人の心ぞなかなか奢らむよりもたふとかりける

儉

いたづらのつひえを省きおのがじゝ業勵みてぞ世は進みゆく

博愛

私のことはおもはずなさけをも富をもわかつこゝろもちてむ

修習

読み書きを學びおほせて後に又世にたつわざもきはむべき哉

智能

日に月にひらけゆく世にさきがけむ海の内外の事をきはめて

徳器

物に觸れことにあたりてまどはざるひろき心の人とならばや

公益

をさめ得しわざを勵みておのれまづ御國の爲に富をはからむ

世務

つはものにめさるゝも又みつきもの納むるも又人におくれず

國憲

萬代もかはるべしやはすめ國のとほつみおやの重きおきては

國法

おほやけののりを守りてまつりごと正しき國の民と呼ばれむ

義勇奉公

いざといはばなにかをしまむ家も身も君の爲には國の爲には

聖訓

千萬の民と俱にとのたまひしおほみことばぞくにのいしすゑ

咸一其德

大君のみいづのごとく動きなしこの日の本のためこのころは

新年

新年祝世

屠蘇も酌み門もかざりてひたすらに御代安かれとまづ祈る哉

老が身もなほながかれと思ふまでたのしみ多き御代は此御代

新年言志

勉むれば勉むるしるしあらはれて樂みおほき御代となりぬる

あづさ弓はりしちからをひきしめて今年はとげむ長き望みも

こゝろざしとげむ其日を初めにて祝はむ年をまつぞたのしき

老が身も御民の數のひとりとして年ほきかはす御代のかしこさ

元旦熱海にて

和田の原波路はるかにのぼる日の光ぞ御代のみいづなりける

諒 闇 元 旦 言 志 (大正二)

いひおくる文の終りに可祝ともかゝれぬとしぞ淋しかりける
めでたしといふ人もなくしめやかに淋しき年を迎へけるかな
うき雲のとざせるまゝに門松もたてずむかへし年のさびしさ

山 家 新 年

こよみだにあらぬ山家も年たてばみやこにまさる松飾りせり
新年撞球會にて

新玉の年のはじめの玉いくさかちどきあげむつはものやたれ

諒 闇 元 旦 言 志 (昭和二)

天の戸の明くるをまちて眼ざましく振ひ興さむ大和ごゝろを

藤倉電線會社の新年會に庫開きを

藤倉の戸はひらかれてかすおほき寶はいまや世をとますらむ

春

春 雪

降りかゝる園の竹むらはらはねどひとり消えゆく春のあわ雪

朝 霞

朝日かげのぼる高根のまつ原もかすみにももるはるのひと時

野 霞

をちかたの野邊も霞に埋もれてつばな抜く子の聲のみぞする

名 所 霞

嵐山みねのさくらは咲かねどもかすみわたれり嵯峨も御室も

都 春

櫻田のみほりの氷とけはててのどかにかすむおほうちのやま

山家春

みや人も訪ひ來る春になりにつけり花にこもれる山のひとつ家

野鶯

鶯のこゑ聞きながらいましばしまばしといひて又いねにけり
怠りの朝いさむるうぐひすのこゑのどかなり竹のしたいほ

雨中鶯

咲きにほふ花の木の間の鶯のこゑはあめにもしめらざりけり

隣家鶯

さしなみのとなりの梅のさきしより鶯きかぬ日はなかりけり
友の飼くめる鶯をきゝて

のどかなる春風吹きてうぐひすの聲さへたえぬ君がいほかな
鶯をまだ聞かぬやと人のとひければ

なつかしき君を訪ひ來る道にしてひと聲聞きつ谷のうぐひす

月前梅花

いづれをか花ともわかむ梅園にほひみちたるはるの夜の月

溪梅

まつ人のおほき都にさきがけてたにふところの梅咲きにけり

柳

たちとまる人もありけり我がどのしだり小柳もえそめしより

柳風

音もなく結びつときつ青柳のいとおもしろくかせぞあやどる

若菜

梅が香もまだ深からぬ春の野に若菜つむ子のこゑのどかなり

山家蕨

いざ折りて都のともにおくりてんかたやまかげにもゆる早蕨

春月

大宮の松の木すゑもうちかすみのどかににほふはるの夜の月

春曉

ほのぼのと夜はあけそめつうす霞たなびく奥に月をのこして

夜春雨

長閑なる野邊の遊びのゆめさめて枕しづけき夜半のはるさめ

春野

すみれ摘むをとめのこゑは聞ゆれど霞にこもる春の野邊かな

花

うるはしきものは櫻にたとへけりこの花さかり何にたとへむ

花始開

盛なるよし野の花にまさりけり世にさきがけしそのゝはつ花

吉野にて

しみたてる松も檜もうづもれて花のほかなきみよし野のやま

吉野やまかすみをわけて朝ゆけば袖に散りくる花のしたつゆ

櫻ばなわけ入るまゝにおほくして吉野の山のおくぞしられぬ

吉野懐古

みよし野の花にまさりてかぐはしき人の動も世にかをりつゝ

奈良にて

春日山花のしたかげのどかなりかすみの底にしかもねぶりて

春日野の松の木間にさきたわむ花かけしめて鹿ぞあそべる

京都黒谷の花を見て

黒谷の松の木かげにさくらばなかざして遊ぶ今日のたのしさ

花盛風静

芳野山かせもかをりてのどかなり霞こめたるはなのさかりは

隣家花

うかれさわぐこの宴うたひもよそにして隣の花ぞしづけかりける

深山花

世の中の風もいたらぬ山あひの花はちりにもけがれざりけり

閑中花

隣だになくて淋しきかくれ家も花さきてこそひとにしらるれ

寺花

鐘の音も淋しくひゞくふる寺をおほひて咲けり花はのどかに

庭櫻 (昭和三)

吉野にも嵯峨にも行かず咲きたわむ庭の櫻のはなにうもれて

月前花

うかれつる人は歸りておぼろ夜の月によほへる花ののどけさ

花下言志

言の葉の花もかくこそやまざくら咲きつくさゞる程ぞ床しき

白橋舎主と木更津におもむきたるに千くさ

會員(師の君を迎ふ)といふ歌よみければ

なつかしき言葉の花は残りなく咲きそろひけり君をむかへて

水上落花

長閑にも影のうつると見し花の水のおもてに散るぞはかなき

垣山吹

あれはてゝ見るもいぶせき生垣を咲きうづめたる山吹のはな

丹波博士園遊會の折

塵ひとつ見えぬ園生のこけみちを咲きかくしけり山吹のはな

つゝじ

年経れど高くのびざる石やまの小松のかげにさくつゞじかな

蛙

おもしろく小田に蛙のなく聲をうたひつくさむ言の葉もなし

夕蛙

山の井に櫻散りくるゆふまぐれこゑせわしくもかはづなく也

燕

人はみな田うゑにいでゝつばくらめ心やすげに軒まもるかな

山家藤

山里ののきばの松に藤かづらこゝろのまゝに咲きまとひたる

路臺

ふきのとふ梅見かへりのつとにせむ一つふたつはゆるせ園守

春夢

このごろははかなく結ぶうたゝねの夢も櫻をはなれざりけり

春聲

上野山どよめきわたる聲すなりいかに楽しきはな見なるらむ

春園

のどかなる園のうちかな鳥うたひ胡蝶ねぶれり花にすがりて
はひりよりつゝじ山吹咲きつづく花の園生のおくぞゆかしき
世の塵にけがれざりけり山吹の花の八重がきつくるそのふは

春海

今いでし舟もたちまちかくれけりかすみわたれる春のうな原

春舟

春されば世をうみわたる舟だにも花さく岸ははなれざりけり

夏

首夏吉野にて

みよし野の山ほとゝぎす今もなほふるき都をめぐりてぞ啼く
みよし野の山時鳥聞くまゝにわれも泣きけり御あとしのびて

首夏山家

ほとゝぎす軒端に近く聞きなれて若葉にこもる山かげのいほ

首夏田家

ほとゝぎす聞きつゝ居れば鶯もこゑあはすなり小山田のさと
さみだれのふるやをもれて聞ゆ也米つく音のあなたこなたに

首夏夕月

早乙女の田うゑがへりのすげがさにさすかげ涼しなつの夕月

新樹

花散りてみづ枝さしそふひと時は松もみどりをゆづりける哉
散り残る花は見えすもなりにけりかげ暗きまで若葉しげりて

雨中新樹

飛石につくまで枝をたれにけり園のわか葉のあめにぬれつゝ

社頭新樹

ものゝふのなき魂祭るみやしろの廣前くらしわか葉しげりて

若葉

日ざかりも肌さむきまで風わたる森の若葉のかげぞこひしき

合歡花

うぶすなの森に咲くらし少女子のかざしにさせるねぶの一花

越路に時鳥を聞きて

ほとゝぎすしきりにぞ啼く白雲のむらだつみねの彼方此方に

深夜時鳥

ほとゝぎすしのび音になく一聲をひとり寝ざめの枕にぞ聞く

世のなかはしづまりはてし真夜中にのきをかすめて啼く時鳥

何事もしばし忘れてほとゝぎす友と聞く夜ぞすゞしかりける

墓前聞郭公

なき人のいさを語るか青山のみはかのうへになくほとゝぎす

殘鶯

ほとゝぎす聞かぬ日もなき奥山の青葉隠れにうぐひすの啼く

社頭夏

里の子の遊びどころとなりにけり夏陰きよきうぶすなのもり

柘榴花

梅雨のふるやいぶせき窓のともゆばかりなるざくろ花さく

梅雨

夏草の花の夜市をなりはひのおきなやいかにさみだれのころ

田家梅雨

田人等が簀ほすひまもなかりけり降り續きたる五月雨のころ

雨降りつゞきける夏の頃

一夏を降りとほしつるさみだれの晴るゝまもなく秋は來に息

梅雨晴

さみだれの晴れしあしたはうなるらの軍遊びの聲もいさまし

夏月

日盛のあつさへだてし白かしの若葉もりくるつきのすゞしさ

故郷夏月

ほとゝぎす鳴くなる里に兩親とかたりあふ夜の月のすゞしさ

樹間夏月

夏山のわか葉もりくる月かげはみどりしたゝる心地せらるゝ

竹間夏月

若竹の葉すゑさやかに見ゆるまですゞしく照らす夏の夜の月

水邊夏月

魚躍るいけのおもてにかげゆれてすゞしくうつる夏の夜の月

田上夏月

稻の葉にすがる螢も見えずなりぬ餘りに月のかげさやかにて

盛夏月あかき夜合志大人と九十九里の

濱邊に遊びて

照り渡る月のひかりもたゞよひて波のよるこそ涼しかりけれ

螢

たへがたき晝のあつさもわすれけり越の田つらの螢追ひつゝ
田家 螢

螢飛び蛙も鳴きてちりふかきうき世はなれしをやま田のさと

行路 螢

行き暮れし里の小みちの螢火は窓に見しよりさやかなりけり

なでし子

見るたびに色まさり行く撫子ははその露のあればなりけり

晝顔

百草のしをれがちなる日ざかりに咲きはこりたる晝顔のはな

夕顔

三日月のひかりは空にはほのめきて軒端すゞしく夕がほのさく

夕立

草も木もうちしをれたる日ざかりのあつさを洗ふ夕立のあめ

夏日盛

氷賣る聲さへあつくきこゑ來て山かげこひしなつの日ざかり

山中避暑

岩清水したゝる音も手まくらの夢にかよひてすゞしかりけり

舟中納涼

舟よせてしばしすゞまむ風わたる岸のあふちの花の木かげに

車曳く人の數多憩へるを見て

日盛はなみ木のかげぞにぎはへるおもき車をひきすてにして

納涼風

手すさびにとりし扇もわすられてなつをよそなるならの下風

緑 蔭 染 衣

かげくらく茂る若葉のしたつゆは袖もみどりに染む心地して

夏 朝

今朝もまた袖ぬらしけり露ふかき卯の花垣をひとめぐりして

夏 井

かげ深き若葉のつゆのおちそひてみどりにすめる夏の山の井

夏 池

夏木立しげれるかげの古いけは夏もみどりのいろにすみけり

夏 舟

うちあぐる花火の音もしづまりて棹さしかへす舟のすゞしさ

泉

谷かげのいはほの苔のした水はうき世の夏を知らですむらん

夏 山 居

柴の戸はしげる葎にとざゝれてなつもかよはぬやまかげの庵

秋たゝば淋しかるべき山かげの庵こそなつは住みよかりけれ

夏 燈

人は皆はし居に更かす夏の夜の闇にをぐらきともし火のかげ

植ごみのならの若葉のうらおもて照らす火影ぞ涼しかりける

深 山 夏

斧の音ひとつ聞こえぬ奥山はなつもつめたきかせのみぞふく

夏 述 懐

しづかなるこゝろし持たば夏もなほなに羨やまむ海邊山おく

秋

秋

空高く月もこゝろもすみわたる秋をさびしとたれかいふらむ

初秋

にはかにも風ひややかにけり庭の萩原つゆふかくして

庭前萩

宮城野もかくやあらんと思ふまで咲きみだれけり庭のいと萩

折萩

いざ折りて神の御前にさゝげてむ垣根に咲ける萩のはつはな

萩を人の乞ひければ

御佛に手向けんといふ言の葉をめでて折るなり萩のはつはな

女郎花

とりどりに咲きたる萩の花園にわきて目にたつをみなへし哉

朝顔

朝きよめよしおくるとも朝顔の花をめでばやつゆのひぬ間に

朝顔の花のそのともなりにけり垣のやれまも咲きおほひつゝ

今しばし日かげにおきて楽しまむ露のひぬ間の朝がほのはな

隣家朝顔

つちかひし隣のあるじ起きぬ間にさきがけて見む朝顔のはな

朝顔を見つゝありける折友の音信を得たれば

朝顔の垣根を越えてささいでし言葉のはなのいろもなつかし

秋田

おしなべて黄金のまさごまきしごと豊かに實のる秋の千町田

虫聲先秋

青桐のひと葉もいまだ散らぬ間に秋をしらする虫のこゑかな

新秋虫

おりたちて涼みし庭も秋たちて虫のやどりとなりけるかな

月前虫

虫の音もわきてさやかに聞こえけり秋のなかばの望の夜の月

照る月のひかりのみかはなく虫のこゑもさやけき庭のはぎ原

秋風

ひとりねの枕さびしき小夜中の夢おどろかすあきかせのおと

初秋風

ゆたかにもみのる早稻田の稻の穂に波うちよせて秋の風ふく

野分のあした虫の音をきゝて

朝顔のはなのまがきはあれはてゝ鳴く虫の音も悲しかりけり

行路露

八千草の花さく野路を朝ゆけば袖しぼるまでつゆぞこぼるゝ

月前露

いぶせしとおもひし庭の草むらに露おきそめて月ぞやどれる

川露 (難題)

いさら川咲きおほひたる秋萩の葉末ひかりておけるあさつゆ

秋雨

のどかなる花にそゝぎし様かへて紅葉をそめむ雨のさびしさ

破れのこる軒のばせをの葉表にかゝりてさむき秋のむらさめ

朝顔の垣もくづれし庭のおもにさびしさそふる雨のおとかな

虫の音もにはかにやみて板ぶきの軒端にそゝぐあかつきの雨

月

雲を出で雲にかくれてかはりゆくさまおもしろき秋の夜の月
物は皆あはれをそふる秋の夜をかげおもしろく月はすみゆく

深夜月

笹の葉の露ゆりこぼす風もなく更け行くそらにすめる月かな
窓の外の芭蕉の廣葉つゆしろく月にひかりて夜は更けにけり

明月如晝

星のかけ一つ二つはのこれどもひるにかはらぬあきの夜の月
草むらにすだく虫さへ見ゆるまでさやかに照らす望の夜の月

月宿露

八千草の花にも葉にもおきあまる露にひかりをわくる月かな
待月

袖垣のへだてぬ友といざこよひかたり更かさむ月いづるまで

月浮水

木の間もる月かげ清したに川のながれをひける池にうつりて
海邊月

荒磯のなみにくだけてしら玉のひかりを散らすあきの夜の月

湖邊月

湖にこよひは月もみちく／＼てうき世をよそにすみわたるなり
浦月

浮雲のたえ間もりくる月かげにきらめきわたる須磨のうら波

島月

いつくしま紅葉のかげにふす鹿もさやかに見ゆる秋の夜の月
終夜對月

肌寒く夜は更けたれどさやかなる月を残して寝らるべしやは

月夜友におくる

年ごとに目なれし月も新やかた今宵はわきてさやけかるらむ

月夜に友を招ぐとて

一とせにひと夜の月をふたつなき友とめでばや歌がたりして

高殿に見なれし月もをりくは賤がふせ屋に來ても見よかし

月のいづるをまちて

もろともに見むと思ひし友は來で月まつほどの長くもある哉

月夜會友

もてなしもかたらふ種もつきぬ間にかげしらみゆく有明の月

松影映庭

月影のかたぶくまゝにさまかへて芝生にうつる松のさやけさ

霧

今まではさやかに見えし不二の根をいつ朝霧のたちかくし劔

月前雁

鳴きわたる雁が音たかし照る月の影もさやけき秋の眞夜なか

市中雁

にぎはひし菊の夜市もしづまりて更けゆく空を雁鳴きわたる

鶉

ひるもなほつゆけき秋の野路ゆけば尾花がくれに鶉なくなり

庭菊

奥もなき只名ばかりの庭なれどほこるに足れり菊のさかりは

大内山といふ菊を

花の名の大内やまぞなつかしきまだ御園生のきくはしらねど

御代の光といふ菊を

朝風にさざりは晴れて大御代のひかりまばゆきしら菊のはな

青山の雪といふ菊を

青山の園生の菊ぞ咲きにける不二のたか根のゆきと見るまで

田家の菊

隣すらとほくへだたるるなか家の垣根おほひて野菊はなさく

溪菊

葛紅葉はひかゝりたる谷あひのいは根にさけり白きくのはな

秋光會にて

菊のはな咲ききそひつゝ秋の日の光みちたるそのうちかな

紅葉

のどけさは春にゆづれど初霜のそめし紅葉にしきいろぞなき

庭紅葉

奥ふかき箱根の紅葉さながらに見ることちする園のうちかな

満山紅葉

九十九折のぼりゆくての山は皆からくれなるにそめ渡しけり

谷紅葉

色あせて残る紅葉ぞなつかしきはつ雪降れるたに間たに間に

林紅葉

道もなき林の奥に入りけりもえむばかりのもみち見ながら

霧中紅葉

きりこめて峰も麓もわかねどもたどり行くてはみな紅葉なり

散紅葉

夏山の頃より待ちしもみち葉のさかり短かく散るがはかなさ

初紅葉を友に送るとて

茸狩の得ものにそへておくるなり色なほ淺きもみぢなれども

秋朝

朝戸出の袖ひややかにおぼえけり庭の芝生のつゆしろくして
わが植し垣の朝顔咲きしより起きぬほどだにたのしかりけり

秋祭

里かぐらうたひはやして秋まつり昔ながらににぎはしきかな
笛つゞみ音もとゞろにうちはやし秋はにぎはふうぶすなの森

秋園

奥ふかく見ゆる園かな菊も咲き紅葉のかけもいけにうつりて

青山御所に近く住みける折

落葉たくけぶりたゞよふ夕まぐれ近き御園に田鶴が音ぞする

鉢うゑのみどりも深き松が枝に散りてかゝれり紅葉三つよつ

田家秋

秋祭りいたるところににぎはへり土につくまで稻穂みのりて

山家秋

紅葉にはなほはやけれど茸狩りて山あそびせん小春日よりに
栗の實の落つる音にもひとしほの淋しさまさる谷のひとつ家

秋川

川上はあきたけぬらしもみぢばの散りて流るゝきよたきの川

二百十日果して風つよかりければ

年毎に荒るゝ例しの今日なれどよもかばかりと思はざりしを

折にふれて

さまざまにふみにじられし八千草も花咲きにほふ秋の野邊哉

新嘗祭に故郷より新米を送り越しければ

ふるさとの小田の新米新嘗のあさはまんとはおもひがけきや

公園にて

八千草の花のなかみち行きかへり日比谷の園にひと日暮しぬ

秋霜

蟲の音もかれにし庭の草むらに秋暮れそめてしもぞおきける

冬

朝時雨

聞きなれし軒の雀のこゑはせて時雨のおとのさむきけさかな

山中時雨

霜がれのこすゑ淋しき山かげにあられまじりの時雨降るなり

聞落葉

書讀みてやゝつかれたるうたゝ寝の窓の外寒く散る木の葉哉

陣中霜

劔太刀はきて起き臥すますらをの袖も霜にやうちこほるらむ

木枯

あたゝけきふすまかさねて寝たる夜も音ぞ身にしむ木枯の風

朝霜

朝戸出の衣手さむしいろあせし菊のまがきのしもしろくして

寒草

小笹のみ青くのこりて霜ふかき野路のかや原枯れふしにけり

冬花

芝は枯れ紅葉は散りて霜深きまがきに咲けりうばら三つ四つ

枯蘆

ねぶり居し鴨もにはかにたつばかり芦の枯葉に風さわぐなり

池氷

櫻田のみほりもけさは水鳥のあそぶひまなくこほりはてたり

冬曉月

牛の乳をくばる車のおとさえてひかり身にしむあさ月夜かな

杜月

ふくろふの聲もきこえて有明の月かけすぎきうぶすなのもり

嶋冬月

鳴きわたる千鳥のこゑのさやかにて月こそ照らせ沖の島やま

行路冬月

往きなれし道にはあれど霜さえて月かけすぎく見え渡るかな

寒月照梅花

おく霜の白きがうへに照る月のひかり身にしむ梅のはなぞの

雲

門過ぐる人もすくなくなりけりみぞれ交りに雪も降り来て

雪

枝やさけん幹や折れんといらてども拂ふはをしき今日の大雪

初雪

身にしみて風寒けれどまどの戸はさゝれざりけり今朝の初雪

朝雪

折れぬべく窓の吳竹たわめどもはらひかねたるけさの雪かな
子等は皆だるまつくりて遊ばんといさみたつなりけさの大雪

城趾雪

いにしへをしのぶとりでの石だゝみ鱗のごとし雪のつもりて

日曜に雪いみじうふりければ

木の芽煮て心しづかになぐさまむ雪見ながらに歌もよみつゝ

大雪の朝千葉寄人より歌の添削にせめ

られ居ると電話ありければ

とりどりの筆の負目の積らずば雪に慰さむ今日にてあらんを

湯豆腐にこたつかゝへて歌よみて雪見まさんを儘ならぬ世や

冬朝

風さむみ池もこほりて早起きのおぢも朝いになるゝころかな

冬橋

さらぬだにあやふく見ゆる谷川の丸木の橋にしもこほりけり

忘年会の折

うるはしき言葉の花の咲きいでゝ年の暮ともおもほえぬかな

歳晚大倉鶴彦翁に

君が經む千代のほきごと來ん年も繰り返さんと祈る今日かな

歳晚言志

あづさ弓矢よりも早き年月におくれぬひとゝなりぬべきかな
幾十たびこよみの數をかさねても足れりと思ふ年はなくして

震災直後の歳晚述懐

如何にして越すべきものか年の瀬に峻しき岩ぞたち續きたる

除夜言志

かりがねの聲身にしみて都にはひそむところもなき年のくれ
夢のごと月日かさねておのが身の年をかぞふる夜と成にけり

戀

初戀

むらぎもの心は君にあくがれて聞えずなりぬおやのいさめも
垣間見し其はじめより楨の戸の明け暮れ君をこひぬ日はなし

未言戀

未如何に身はなりはてむきみがためくだく心を君し知らずば

通文戀

玉づさにひめしたがひの睦ごとは繰り返せども知る人ぞなき

逢戀

さゝがにのいと長かれと思ふ哉こひにこひつる君にあふ夜は

欲逢戀

憂きことのなほ積るとも小車のめぐりあふ日を待ち渡りける

聞戀

夢にだに見ぬおもかげのいかなれば聞く度毎に思ひそふらむ

不見戀

人づてに聞きそめしよります鏡見ぬおもかげのなつかしき哉

夢見戀

諸共にあひ見ることのかたき身も夢にあふ夜は知る人もなし

思へども人目づゝみのたかければ夢より外にあふよしぞなき

思昔戀

おほかたは夢となりゆく世の中に昔ながらのこひもするかな

春戀

春雨のけふるたに間に若くさのもゆるおもひを知る人やたれ

春ながら雪にうもるゝ下草のもゆるおもひは知るひともなし

夏戀

おく露のなさけもうすき夏草のうちしをれたるわがこゝろ哉

旅中戀

なつかしき君に始めてあひし夜の夢ばかりなる旅まくらかな

君まさばたのしからんを旅衣かさねむつまのなきぞさびしき

老後戀

霜雪をしのぎし松の千代のいろはうらわか竹になにか譲らむ

洩戀

嬉しさをつゝみあまりてほころびし袖口よりぞ戀は洩れゆく

待戀

はゞかりし人目の關もゆるされて妹脊かたらむ春ぞまたるゝ

思切戀せつなる

君がためこゝろは空になく雲雀のぼりつめたるわが思ひかな

馴戀

はづかしき心なきまでうちとけて寝もの語りのつきぬ夜半哉

懸命戀

なつかしき君がためには二つなきいのちも何か惜しと思はむ

忍逢戀

かしましき人目の鬨をのがれ来て忍び逢ふ夜ぞ嬉しかりける

警情死

現し世ののぞみをだにもとげぬ身のあな覺束な後の世のこと

疑後世戀

後の世もともにといひは言しかど越えやなづまむ死出の山路

途戀

さまゝの淵瀬渡りておもひ川水も洩らさぬなかぞうれしき
死に優る憂きに辛きにうち勝ちて遂げし戀こそ嬉しかりけれ

寄海戀

和田津海の深くも君をこひしより胸にあだ波たゝぬ日はなし

寄梅戀

うぐひすの羽かせにほふ梅が香の深くも君をこひ渡るかな

寄雪戀

わが戀は越の白根の雪なれやつもりつもりてとけむ日ぞなき

寄髮戀

君ならで誰かはとかむ君がためおもひみだるゝわがもつれ髮

雜

伏見宮殿下東京電氣株式會社に

御臺臨の日詠みて奉る

(大正八)

國民のいそしむわざもはえにけり畏きみかげ今日はあふぎて

朝香宮北白川宮兩殿下 同上

(大正一〇)

花も咲き實も結ぶべしみめぐみの露にうるほふにはの草木は

久邇宮殿下御四方 同上

(大正一〇)

限りなき御國の富をさらにまた深からしめむ今日のいでまし

同殿下より銀盃を下し賜はりし折

とこしへにいへにつたへむたまもの菊が香ふかきこの御盃

同殿下箱根の御館にて賜謁の折

世の塵を入れぬ箱根のたかどのに仰ぐもかしこ玉のみけしき

久邇宮御殿へ參上しけるにピアノのしらべ

いとさやかなりければ

奥深き宮居にひびくものの音にくいの榮えのほどぞ知らるる

庭訓

世に高きいさを輝やく人もみな庭のをしへぞもとるなりける

教育

植込みも心して刈れしげりあふうちにひいでむ枝もこそあれ

心して枝をためずばなかなかにのびむこ松の枯れもこそすれ

生徒

學びやに通ふわらべの背にかたにかゝるや國の重荷なるらむ

義

いかならむ事にあふとも吳竹のたわまぬ節はたてとほしてむ

讓

もろともに譲りあひつゝ交りの廣き世にこそたゝまほしけれ

廉直

吳竹のなほき心をたもつ身はとみのちからにたわまざりけり

親恩

今もなほ若きにまさる老が身をほこるも親のたまものにして

至誠通神

目に見えぬ人の心のよしあしは神によりてぞ世にしられける

才氣

物に觸れ事にあたりてさまざまにはたらくほどの心もたばや

壯心

思ふ事とげざるほどぞあらはるゝ岩もとほさむ堅きこゝろは

心

をさな子がつくや手毬の圓まきかにてあらまほしきは心なりけり

精神一到何事不成

思ふ事なしてとげざる物やあらむおのが力のたゆまざりせば

業務

こゝろざしなりも成らずもおのがじゝ務め勵まむ身の程々に

浮沈

浮ぶ瀬はくるしき淵に沈みつる人を見てこそ知るべかりけれ

用慎

あやふしと心もちるで渡りなばふかき淵瀬もなにおそるべき

恩

聲もなくかたちも見えぬ心根にふかくつちかへ人のなさけは
救はれてかたじけなしと目に見えぬ心にきざむ人ぞまれなる

誠

秀でたるちからなくとも思ふことつらぬくものは誠なりけり
かしこみて神にぬかづくつかのまの心や人のまことなるらむ

一 正 歴 百 邪

邪のこゝろ持たずば世の中におそろしとおもふ事やなからむ

誤 解

親みのふかきなかにも兎もすれば思ひたがへのあるがつね也

人 亡 道 存

身をすてゝ國につくしゝものゝふの動ぞやがて世の教へなる

善 行 表 彰

曇りなき身のおこなひはいつか世に鏡となりて表はれにけり

慎 獨

よしあしはいふに任せておのが行く誠の道をふみはたがへず

陰 徳

やがて身の幸となるべし國のため世の爲め盡す人のまことは

力

山を抜き海をうづめむ大業もなにかたからむひとのちからに

協 力

何事も遂げんはかたしたすけあふ友とちからを協せざりせば

成 功 在 協 力

何事もならざらめやは巖をもとほさむちからともにつくさば

努 力

おくれじとはげむ心をさきだて、ゆくても遠き道にたちなむ

奮闘

日は暮れて行方は遠き道なれどたふれむまでも進まざらめや
まごゝろの限りつくして極めてむ世にたつ道のよし遠くとも

譽

世の人のおもひいたらぬ何ごとかなしとげてこそ譽なるらめ

疑

しばらくは塵に光のくもるともぬぐはゞもとの玉となりなむ

緊張

諸共にこゝろを締めていたづらにつひやすなかれ時も黄金も

研磨

憂き事の身にふり積るたびごとにこゝろの玉は磨かれにけり

なにならぬ石もみがけば磨かざる玉にもまさる物とこそなれ

恒産

憂きにたへ辛きにたへてくづ折れぬ力ぞ人のたからなるべき

恒心

掻き亂す人のちからのおよばざる深きこゝろを恒に持たばや

攪亂

玉のごと清くながるゝやまかはの水もみだせばうは濁りする

思表色

糸竹のふしおもしろくうたひめのうたふ聲にも浮き沈みあり
うちたゝく鐘のひびきもその人の心によりて晴れくもりあり

文

たらちねの教への文はくりかへし讀む度ごとに膽にしみつゝ

筆

天地の神のこゝろもうごくらむまことこもれる筆のちからに

机

虫はみしあところ見ゆれむかしわがいろは習ひしちいさ机に

唯我獨尊

よしあしはいふに任せて寢覺よき事こそなさめ吾もますらを

歌

世の人のながき眠りをさますべき言葉の花をさかせてしがな

良妻

子をいだき老をいたはりなりふりも飾らぬ妻ぞ家のいしすゑ

賢母

品高き母となる身のかがみかな子をいつくしみ親につかへて

内助

世にたてし勳のあとをかへりみよなかばは妻の助けなるべし
忘るゝな今は時めく身なりとも世にあらはれぬ妻のたすけを

夫婦

手ともなり足ともなりてたすけあふ妹脊よりこそ家は榮えめ
家の風吹き興さんも難からじめをとかたみにみちをつくさば

夫婦有別

横の戸のあけくれ家をまもらばや敷居鳴居のわかちただして

長命

ながいきにまさるものなし様々の珍らしき事見たりきゝたり

敬老

年高き人の教へはくりかへしかたるも聞くもともにたのしき

老

今聞きし事も忘れて聞きかへし笑はるゝまでいつ老いにけむ
今置きし物もわすれてかへるまで頼りなき身といつなりに劔

醫師

身を知らぬ人おほき世に人の身の病をいやすひともありけり

觥力

ふみしむる四股のひゞきのほどくゝに優り劣りの力見えけり

農夫

鎌とりて八つかたり穂を刈る田子の心やいかに楽しかるらむ

勞働婦

賤の女と誰かいふらむ乳兒を負ひ車ひきつゝわざはげむ身を

田舎人

かげ日なたなきが嬉しき田舎人そのおこなひは荒く見ゆれど
るなか人さまあしけれど飾りなき心のおくのうるはしきかな

自尊

いざといへば己れに優る友ぞなき皆はらからと思ひける世に

深友

へだてなくむつびかはして親みのふかき心のおくぞゆかしき

良友

あやまちを思ひかへして改たむる人ををしへの友とこそせめ

舊友

新しきものゝみきそふ世なれども古きにまさる友なかりけり
日に月にあらたなる世もまじらひの古き友こそ嬉しかりけれ

談舊友

山かげのおなじ岩井の水汲みしむかしがたりに今日も暮しつ

警 悲 觀

憂しとのみかこつをやめよ勉むればその程々に効驗ある世を

世 事 多 障

梓弓矢よりもはやきつき日にもなほ年の瀬はある世なりけり

警 亂 醉

何事ぞ酒にこゝろをうばはれて身のおこなひをとり亂すとは

行

すぐれたる力なくとも世の中の人に恥ぢざるおこなひもがな

忙

つくすべき内外のことの多くして暑さ寒さもかこつまぞなき

巧 言 令 色

いつはりの言の葉草に咲く花は色こそよそへみのらざりけり

趣 味

何事も遂げんはかたし人ごとに一つたのしむみちなかりせば

数々の憂きもつらきもなにかあらむ外に樂しむ道を知る身は

菅沼撰手の撞球術を見て技入神といふ事を

驚かぬものなかりけり神ならぬ人のわざとはおもほえずして

活 花

天地ののりにかなへるいけ花のみちにわけ入る人の氣だかさ

和 樂

物はよし足るも足らずも笑ひごゑみちたる家のうちぞ樂しき

愛

かたことに語るうま子のかはゆさを忘るゝ間なし朝な夕なに

繁 榮

兩親もつま子もともに榮えけりこのうへ何を世にもとむべき

健 康

まかゞやく玉も黄金もなにかせむやまひなき身ぞ寶なりける

家族の笑めるうつしゑを見て

苦しみのおほき家にもをりくはかゝる樂しき様を見るかな

舌

わざわひの門にこもれど國をさへ動かすものは舌の根にして

目

長くなりまどかになりて三毛猫の目は時計るうつはとぞなる

聲

をさな子の書讀むこゑをあさ聞けば鶯よりもどけかりけり

響

午の時つぐるなりけりをさまれる御代にとゞろく大砲のおと

大 勢

みなざりていきほひすごき大川の水の流れをせかるべしやは

婦人の虚榮を嘆きて詠めるうちに

みめかたちかざらんよりもますかゞみ見る度ごとに磨け心を

あなうたて紅おしろいに親しみて心をみがくひとのすくなき

なりふりのはやりのみ追ふをみな等の心の駒をいかで止めむ

警 惰 夫

いたつらに驕る妻子にひかされてほろぶる人の世に多きかな

警 婦

身のほどを知らぬをみなのおごりより國も亂れむ家も亡びむ

ある朝

親はいかに朝まだきよりをさな子が納豆うりゆく聲あはれ也

自戒

心せば怪我あやまちもまぬがれむ花にあらしの障りある世も

内外多事

しばしだに安きころはなかりけり御國の内外事おほくして

清水一角の酔興

岩が根を切りとほしゆく眞清水はさゝの露には濁らざりけり

幸遇聖代

おのがじゝ勉め怠りほどくくの身の行く末に見ゆる御代かな

四民平等

大御代の光をあふぐ人の身にたかきいやしきなにかあるべき

警後車

揖を取る其手ゆるぶなはせ行きしさきの車のくつがへりたる

經世

樂しみのおほかれとのみ祈らねど苦しかれとも願はざりけり

世渡りは辛きものとは知りながらよも斯程とは思はざりけり

浮世とは悟りながらもをりくは慰む事のあらばとぞおもふ

精神一到何事不成

ますらをのたけき心をくだきつゝ勵みてならぬ事やなからむ

萬人同感

みめかたち皆かはれども身を思ふ心はたれもおなじかるらむ

密婦

おもひきや世に誇るべき花なるを秘めて樂しむ人あらんとは

警 依 頼 心

天地のめぐみのつゆのかからざる大木の蔭にたちよるなゆめ

世 治 事 業 興

つるぎ太刀鞘にをさめて國民のきそふはおのが務めなりけり

不 知 足

限りなき望みをいづく人びとは足れりとおもふ時やなからむ

物 有 長 短

かげ廣くしげれる竹のはやしにも揃はぬ節はあるが世のなか

文 化

大空をかけるうつはも海原のそこゆくふねもかすそはりゆく

水 力 電 氣

ひかりともちからともなる山水の限りなくこそ世を富すらめ

限りなき水のちからにいなづまのおこるは國の興るなるらむ

樂 耳 王 を き へ て (大正一四)

とつくにの唄も話も居ながらに聞かるゝまでに世は進みけり

水 力 富 國

火をおこす水のちからに皇國のひかりも富も日々にそひゆく

電 燈

ともし火のひかりかゞやく家ごとに富も譽もみちわたりつゝ

大空のものとおもひしいなづまの光あつめて照らす御代かな

電 車

稻妻のちからにめぐくるまには阪も重荷もさはらざりけり

飛 行 機

つばさある器に乗りて見てもこむ高天のはらも月のみやこも

うらやまし花のみやこを下に見てこゝろのまゝに空かける人

自動車

ひく馬も押す人もなく風きりてはしるくるまのいさましき哉

瓦斯入電球

瓦斯入りの球のひかりに親みて語るがたのし夜のふくるまで

寫眞術を

ひたすらに研きし技のあらはれて生けるが如く見ゆる寫し繪
秀てたる技によりてぞうつしゑも呼ばゞ應へむ心地せらるゝ
形なき人のこゝろも見ゆばかり寫すちからのたのもしきかな
さながらに生けるが如きおもざしはすぐれし技の力なりけり

水害の惨状を見て

家は流れ人は溺れてあはれなり寝耳にみづのおそひきたりて

築港

年どしにくにの境をひろめけりなみをせきとめ海をせばめて

家

まごゝろを礎にせばかやの屋根竹のはしらもなにうごくべき
國の爲めたてしいさをのかゞやける玉のいらかの奥ぞ床しき

長屋住居

はなし聲かたみにもれてさしなみの壁隣こそしたしまれけれ

欄

湯あがりのかろき袂にくれなるの紅葉散りくる宿のおばしま

溪橋

白雲のおりゐるたにをしたに見て峰よりわたす木曾のつり橋
瀧つせのしぶきもかゝる谷あひの岩より岩にわたすいたはし

船

千里をもとなりの如く行きかよふ船によりてぞ世は進みゆく

巖

苔もむし松も根ざして動かざるいはほや國のすがたなるらむ

苔

天津日のひかりに遠き谷あひの岩根みどりにこけのむしたる

松

蔦紅葉はひかゝりたる岩かどの松こそあきははえまさりけれ

杉

晝もなほしげりて暗き箱根路の杉はいくらの代をか経ぬらむ

田家烟

ゆたかにも實る田つらのを^{もち}こちにたなびきつとくゆふ烟哉

晩山雲

しづかにも夜は明けそめてよろこびのくもぞたなびく南^{みなみ}の山

遠山雪

波をいづる朝日をうけて海ごしにまばゆく見ゆる不二の白雪

松上鶴

わたり來し新羅のつるか對島がた磯松が枝につばさつくろふ

河水清

朝日かげのぼる小鮎も見えすきて底まですめり多摩の河みづ

海上風静

いさりする舟もやすげに見ゆるかな葉山の海は風もなくして

松影映水

九重をめぐるみかほの深みどりくもるの松のかげぞうつれる

海邊眺望

あら磯の岩根にたてる老松の葉ごしに見ゆるしら帆みつよつ

雲

大空もとざし、雲のなごりなく晴れてゆくへはたにか高根か

波

ふたゝびはおなじ様には見えぬかなよせてはかへす波の姿も

曉鐘

こゆるぎの磯うつ波の音たえてさやかにひゞくあかつきの鐘

山寺燈

かねの聲かすかにひゞく古寺にひかりさびしき法のともし火

鳥

空に翔り水ぎはにあさる鳥だにもおのがねぐらは忘れざり飛

鴛鴦

枝たわに雪をいたゞく松のかげうつれる池にをしのねぶれる

百舌鳥

鳴る子にはなれし山田の稻雀むらがりたちぬもすのなくねに

牛

荷くらにはわらべを乗せてるなか道紅葉のかげに牛の憩へる

寶

さま／＼の事にあたりて惑はざる心にまさるたからあらめや

鏡

よしあしのひとのこゝろもうつるらむ神の御前にすうる鏡に

玉

まかがやく玉をめでざる人ぞなきあがなふ力ありもあらずも

綾

綾にしきかさねてつゝめくもりなくみがきあげたる玉の心を

盃

天地を握るちからをやしなはむ玉のさかづきそこあさくとも
さかづきの數かさなりて親みのふかきこゝろの奥ぞ見えける

記念盃

白銀のこのさかづきにみなざりてくめどもつきすひとの勳は

三弦

つめびきの三筋の糸の細くともながき契りをたがへざらなむ
さやかなる三筋のいとものしらべには心ひかれぬ人やなからむ

釣竿

弓となり矢となる竹もすなほなる子等が蟹釣る竿となりけり

案山子

簀は破れ笠は傾ぶくかゞしだに弓矢とる手はゆるめざりけり
おのがじゝ務め守りて撓みなき小田のかがしにしかぬ人あり

雛

をとめ子がひなにそなふる白酒にさやかに浮ぶ桃のひとはな
宮人のひゝなかざりてたのしげに遊ぶをとめの様ぞおかしき
少女子が紙もてつくるひひなにもおくゆかしさの見ゆる宮人

嬉しきもの

行きくれてやみぢになやむ山里にともし火ひとつ見えし其時

かかるた遊び

をとめ子に親もまじりて笑ひごゑ外まで洩るゝかるたとり哉

樂しきもの

ゑめる親よろこぶ乳子のありさまに優るものなし家の内には
勇ましく身つくろひして學びやに出で行く子等を見ぞ楽しき
むらぎもの心くだきし事なりて後こそひととはたのしかるらめ

實業富國

大御民つとめはげめる事わざに國のさかえも見ゆるうれしさ

古戰場

(旅順にて)

ものゝふのかばねさらしゝあとゝへば光身にしむ弓はりの月

月前古武士

弓張の月にむかしをしのぶらん矢並つくろふをちもありけり

不二

大御代のすがたを見せて天地とともに動かぬ不二のかみやま
雪しろき峰のみ空にのこりけり八重たつ雲になかばかくれて

たちまよふ雲もなくして大空にそびゆる不二のかげゆたか也

倒不二

大空に聳ゆる不二をさかしまにそのまゝ見する芦のみづうみ

故郷にてよめる歌ども

百とせにちかき母あり友もあり老てもたのしなつかしのさと
時計るうつはのほかにおとなくて月にふけゆく山かげのいほ
横の戸もあけはなしたる田舎家の奥にさしいる月のすゞしさ
木がくれて家こそ見えね鶏のこゑするところとなりなりけり
柴の戸もさゝでおき臥す田舎家は住み心地よし浮世はなれて

故郷に電燈のつきし折 (昭和二)

大方は荒るゝならひのふるさと日々すすみて都めきたり

友とかたりて

うたゝねの夢にも見てし友どちとあひ見る今日は思ふ事なし

談政事

酒汲みて月に親しむまとるにもこゝろは國のうへをはなれず

談忠孝

たらちねに、國につくせと語りあふことばの花にます色ぞなき

圍碁の友

戦ひのたびかさなりて碁かたきは親しみ深くなりまさりつゝ

勝碁

居ながらに勝鬨あげて攻めかこむこの楽しさを何にたとへむ

敗碁

勝ちたりとおごる心のたゆみより思はぬひけをとる時もあり

成敗在 一石

大砲の音よりたかくおもふらむうちこまれたる石のひゞきは

澤龜といふ酒を

萬代のよはひたもたむ澤龜の身のやしなひのものはこのさけ

警酒

たをやめのすゝむる玉の杯にゆめなおぼれそうかぶ瀬はなし

節酒

よしあしのその折々にくみかはす酒にも程はありてふものを

うま酒は百の薬のをさといへど身をそこなはむ程をすごせば

節酒 煙

いたづらに用ゐるなかれ身をそこね心を見だすさけも煙草も

御濠に魚の躍るを見て

櫻田のみほりにうつる老松のかげをみだして魚ぞをどれる

御即位式場拜觀の折 (大正五)

限りなき青人草の葉すゑまでめぐみのつゆぞおきあまりける
久かたの雲井はるかに高御座あふぎみるよにあへるかしこさ
數ならぬ賤がうへにもみめぐみの露おきあまる御代ぞ嬉しき
還幸ましますと承りて

大御かけ仰がすとても事なくて還ります日と聞くぞうれしき
鳳輦を拜して

大君のみいづかゞやく天津日の旗手になびく四方のたみくさ
神戸舉一君の新邸にまねかれて

いしすゑのかたき心をゆるがざるこの高どのゝ上に見るかな
同 庭園を

數おほき植木もいしもはえにけり時にあひたるひろき園生に
きづきたる庭とも見えす居ながらに谷も高根も見る心地して

木 石 有 喜 色
こゝろなき木にも石にもよろこびの色こそ見ゆれ處えがほに
御殿山山口氏の館にて

百千舟たえず行きかふたけしはの浦波やすく見ゆるたかどの
伊豆吉濱なる山口氏の別荘にて

和田津海の廣きこゝろも眞鶴の千代のよはひもしむる君かな
學校の卒業式に

うるはしく咲きにほひけり青山の學びの園のやまとなでし子
同 生徒に

園守につちかはれてぞしこ草も花さくまでにおひたちけり
同 卒業生に

なさけある教への言葉しをりにてゆくて果なき道にたゝなむ

同 師の恩

玉ならぬ身にもひかりぞそはりける教への親の深きなさに

同 校恩

なでし子の花さくまでにおほしたてし園生の恵いかで忘れむ

同 告別

ふる里に花をかざして歸るにもさらばといへば悲しかりけり

學 園 の 花 を

教へ草しげれるそのにさく花は菊もダリヤもいろぞまされる

桂離宮拜觀の折

住む魚のひそむところもなかりけり御池の水の底きよくして

閑 居

大方の塵はさけたるかくれ家も世のかなしさは通れざりけり

幽 遠

名も知らぬ鳥の音もして奥ふかきみやまに似たる園の中かな

閑 庭

瀧つせの音もきこゆるこゝちしてこのつき山の奥ぞゆかしき

都 閑 居

内日さすみやこに住めど世の人に知られぬ身こそ心やすけれ

麓 幽 栖

白雲のたなびく峰を軒に見てふもとのいほぞしづけかりける

閑 中 夢

世のうき目見えぬ深山の庵なれどみやこの夢はなほ通ひつゝ
道もなき世のかくれ家もおとづれて夢路に通ふ友はありけり

山家水

しげりあふ松の下露おちそひてみどりにすめる山の井のみづ

晴天鶴

天津日のかゞやきわたる大空につばさをのべて鶴ぞ舞ふなる

社頭水

末遠く世をうるほさむしめはえし神の御垣をめぐる小がはは
とこしへにすみわたるらむ神苑に年ふる岩をめぐるしみづは

水

さまざまの器になれて海となり瀬となる水をこゝろともがな

國勢兒戯におよぶ

うなる子のかた言にさへ外國をうてやこらせと歌ふ雄々しさ

電力課税の不當を嘆きて犬養遜相に

源は深きみくにのまつりごとあさ瀬よりこそかきにごしけれ

丸鬚

美しくくし目とほれる高わけにその人がらもたかく見えけり

寄髮警婦

君がためかたく結びしくろかみも根もとゆるびて秋風の吹く
兎もすれば堅く結びし丸わけの根のゆるびよりかき亂れつゝ

養浩然氣

たをやめの膝を枕の夢の間もみくににゝつくすことはわすれず
名も富も思はざりけりたをやめの膝をまくらに夢むすぶ間は
折をりは歌ひつ舞ひつ酒吸みてこゝろやしなへますらをの友

國民軍の召集令を見て

はかなしと思ふ我身も時を得て御代のまもりと聞くか嬉しき

ツリボリ事件に關し伊土の開戦と聞きて

つりほりのいとのもつれも末つひに國の亂れをひき起しけり

歌詠みおくれたる折

珍らしき言葉の花はのこりなく友につまれついかにかはせむ

大谷光瑞師の第一義諦を讀みて

苦しみもかなしみもなし明らけき御法のひかりうくる此身は

人の揮毫するを見て

手習のみちにおくれし身にもなほ覺えおくべき節は見えけり

歐米視察談を聞きて

目ざましくふるひ興れるとつ國の人におくるな大和ますらを

政界の鬨將尾崎學堂が風吹かば我もなび

かん柳哉とよみたるをこは何の風か与人

のいひければ

青柳のいとのみだれをやはらぐる風のちからの恐ろしきかな

嗚呼一糸紊れず政界の軟化ぶりといふを見て

雨あらし凌ぎしのぎてたわまざる松のみさをにならへ益良男

解散風

青柳のいとのみだれのとけざらば夜半の嵐にたふれもやせむ

國論に背き過大の國防を策せんと聞きて

思ひきや國まもるべきつるぎもて青人くさを薙ぎたてんとは

増師反對

民草の根をやしなひて後にこそ國のそなへはたつべかりけれ

幼きころかきし文を見て

やさしくも拙きまゝに年を経ぬむかしながらの水くきのあと

おのがいとなめる大敷網の不漁をなげきて

誰が網にかゝりしものぞ今日も又市にひさげり鱒のおほうを
大なむら網にかゝれり見にこよと告げ來む時の待ち遠きかな

千くさ會に集會の折おのがとりし寫眞を見て

寫しゑの拙きわざもはえにけりこのなつかしき友のすがたに

おのが家の歌まとるの折(石もすゑ菊も植

えたる)といふ歌ありければ

石もすゑ菊もうゑたる廣庭のあるじと聞くはやさしかりけり

流行性感胃の激烈なりし折

すき間なくこゝろもちふるわが家の奥まで風は吹き荒びつゝ

電車にてよめる中に

乗りあはす車のうちの人の身にわかちなきよの様ぞ見えつゝ

乗り合ひの車のうちの人も皆ゆづりあひつゝ世はすゝみゆく

怠り勝なる人に歌をと友の乞ひければ

怠れる人の末をばすくふべきともみかたも世にあらばこそ

櫻ばなおぼろにかすむ春の夜の夢よりさめよやまとますらを

夏日親族うちつどひて遊び暮しける日

楽しみの深き今日かなながき日を水ももらさず睡びかはして

幼子も老もまじりてうからやから親しみかはすけふの嬉しさ

青たゝみ敷けるが如きひろ廣の芝生むしろにあそぶたのしさ

木蓮の花を持てる木像を得たれど今少しと

思ふ處あり歌一首をと人のもとめければ

思ふ事とげむその日に加へよとたくみは鑿を入れのこしけむ

開墾に服役する囚人を見て

鎖もてつなぎあはされ罪ふかき人見てつみをゆめなおかしそ
鎖もていましめらるゝ身となりておかしゝ罪を悔もこそせめ

中山一位局より子等のためにいと美しき

衣たまはりける折

うなる子の笑みて喜こぶこの衣は我身に着たる心地こそすれ

博覽會にて

めつらしき物おほきかな外國の人の目をさへおどろかすまで

共進會にて

あがなはむ物こそなけれとし年に進めるわざを見るぞ楽しき
進みゆく世におくれじとおのがじゝ競ふや國の榮えなるらむ

観劇の折

人皆のこゝろこゝろに思ふ事ひきくらべてぞ見るべかりける

同 勸進帳を

關の戸をひらくこゝろの櫻花いまもにほへりやまとますらを
なか／＼に打たるゝよりも打つ人や骨も碎くる心地しつらむ

同 美人の幽霊を見て

まぼろしの姿なりとも今しばしとゞめまほしくおもほゆる哉

同 大森彦七

弓矢とる人のなさをかぐはしき楠の若葉のうへに見るかな

同 阿波の鳴戸のおつる

野にも臥し山にもいねて幼子の親をたづぬと聞くかかなしさ
あひ見てもうみの母とはしらま弓引きはなたれし様痛ましも

帝都大震災火災の折 (大正一三)

物凄き修羅のちまたとなりにけり世に誇りたる花のみやこも

うるはしき花のみやこも夢の間にあはれ焼野の原となりぬる
 さだめなき浮世のさまぞあさましき昨日は都今日は火のうみ
 狂ひ死ぬ人や地獄のせめならむほのほにやかれ水におぼれて
 はらからも救ふすべなく成にけり煙にまかれ地震ゆゑにうたれて
 火に焼かれなるもうたれて恐ろしき屍の山をきづきけるかな
 かばね焼く煙たゞよふおほそらにいく千萬のたまかまよへる
 いたましや誰ともわかぬかばね焼く煙に今日も空のくもりて
 家はくづれやからは死にて泣くこゑも涙もかれし孤子もあり
 家のみか親も妻子も焼け死にて生き甲斐なしと泣もことわり
 同 神意といふことを
 限りなくおごり極めし世の人をいましめたまふ神のこゝろか
 同 人心改造といふこゝろを

みくに人昔のさまにたちかへり大和こゝろをみがけとぞ思ふ
 鈍りたる大和こゝろの焼きはがね鍛へかへさむときはこの時

同 婦人の虚飾をいましむ

心なく綺羅をかざりて誇りつる夢よりさめよ世のをみな等は
 よるべなく苦む人の多き世にうたてをみな綺羅びやかなる

造 家

礎をかたくきづきてのちにこそ家はつくらめ見えをはぶきて

震災後復興のこゝろを

御代々々のおきてまもりてきづかなむ朝日かゞやく國の都は
 あらはさむ時は來にけり皇國のためにきたへし大和こゝろを
 つくすべき時は今なりほどくくにわが身のわざを勉め勵みて
 外國の人のちからもとりそへてむかしに優るみやこきづかむ

とつくにの人もまねぎてあたらしき都いはゝむ春ぞまたるゝ

女大學新舊問答といふ冊子に

妻となり母となる身の教へ草つみはやさなむあさなゆふなに
このふみの奥ぞ床しき教へ草わけいるまゝにいやたかくして
長唄の鞍馬山を聞きて

ひきしめし糸の音いろのさやかに鞍馬の山にひゞく聲かな

千葉寄人より日の出の松を書き

御製を謹寫して贈られし折

皇君の御歌のひかりくはゝりてはえこそまされ松もあさ日も
日米共同宣言書を読みて (大正七)

ふた國の中をへだてし霧はれて天津日かげぞかゞやきわたる
若松町の新宅にうつりける日 (大正一)

事そぎてせばき家だにわがものと思ひ定めて住めば住みよき
若松の千代はいのらぬ身にもなほよき名の町ぞ住み心地よき
若松のさとに住ひて老が身もわかきにかへることちせらるゝ

木更津なる豊田養魚所にて鯉を釣りし折

すが糸のこゝろながくもひきよせて鯉釣り上る時のたのしさ
面白し釣れたる鯉に糸や切れむ竿や折れんとあせるしばしは
釣針にかゝれる鯉の躍る間は世のなにごともおもはざりけり
胡蝶といふ小唄の師匠より一首をと望まれて

伏見稻荷の鎮座祭に

のどかなる小とりの唄は花かげの胡蝶の夢にさはらざりけり
伏見山こゝにうつして動きなき里のさかえをいのるけふかな

菊の繪に

ゑがきたる花とも見えす露おきてかゝるがごとき黄菊しら菊
たゆみなき筆のちからに墨がきの菊さへかゝる心地せらるゝ

松林の繪に

たくみなる筆のちからに松風の音もきこゆるこゝちこそすれ
唄ひ女の方

ますらをの猛き心もやはらげむ舞ひもうたひも人にすぐれて

美人川のほとりにたてり

深ばりの絹かささしてたをやめは誰を待つらむ川のほとりに

化粧品の名御園の月

玉のごと氣高く見ゆるよそほひは御園の月のひかりなるらむ

同 御園なでし子

うすくこく心のまゝに咲きいでゝ氣高く見ゆる御園なでし子

同 御園の露

島人もみやこをとめもおしなべて御園の露のたまやかざさむ

同 御園の花

鄙の子の賤しからざる身づくりも御園の花のあればなりけり

同 露の雫

みめかたち人にすぐれて見らるゝや露のしづくの光そふらむ

帝劇女優の名を入れて詠めと人のいひければ

森 律 子

神さびてひるも小暗きうぶすなの森の木の間には月はのぼりつゝ

村田 嘉久子

あまさかるひなの村だに教へ文かく子數多になりまさりつゝ

初瀬 浪子

初。瀬。や。ま。尾。上。の。さ。く。ら。咲。き。し。よ。り。人。浪。よ。せ。ぬ。日。こ。そ。な。く。し。て

鈴木福子

夏。さ。れ。ば。た。も。と。す。し。き。谷。風。の。吹。く。木。の。下。ぞ。去。り。う。か。り。け。り

音羽兼子

花。さ。け。ば。音。羽。の。み。て。ら。時。つ。ぐ。る。か。ね。の。響。き。も。さ。や。け。か。り。け。り

東日出子

鳥。が。鳴。く。東。の。そ。ら。に。ひ。で。た。る。す。が。た。を。し。き。不。二。の。芝。や。ま

橘 薫

九。重。の。花。は。し。ら。ね。ど。た。ち。ば。な。の。か。を。る。園。生。の。う。ち。ぞ。ゆ。か。し。き

白井壽美代

白。雲。の。お。り。る。谷。の。柴。の。戸。は。う。き。よ。は。な。れ。て。す。み。よ。か。り。け。り

神山かしくといふ名をいれて

幸あれといのりまるらせそろかしく神路の山をふし拜みつゝ

智恵といふ名をいれて

世のなかの人のかゞみとなるまでに磨きし智恵ぞ寶なりける

富田理財局長の令嬢六人の名よし子くに子

あき子はな子はつ子みち子を入れて

みよし野のおくには秋のたけぬらし花はつか敷もみちしに覺

荒木看護婦に

名のごときあらきこゝろはなかりけりなす事々に誠こもりて

述懐

敬まはれ慕はるゝ身のおこなひにまさる寶の世にあらめやは

寄歳述懐

五十とせを老の阪とは誰か言ふ世につくすべきときはこの後

寄 水 述 懐

横たはる木の根岩かどうち越えて流るゝ水をこゝろともがな

寄 兔 述 懐

あなどらば兔も龜におとるべしこゝろゆるすな只つかの間も

寄 駒 述 懐

狂ひやすき心の駒をひきしめてうき世の橋をわたりてしがな

寄 鐘 述 懐

つく人の力によりてほどく世にこそひゞけやまてらの鐘

寄 紙 述 懐

ひとひらのうすき紙にもうら表あるは浮世のならひなりけり

寄 水 別

海原にすゑはあふらむかは水の西にひがしにいまわかるとも

懐 舊

なつかしき昔の事をかたりあひて若がへりたる心地こそすれ

寄 虫 懐 舊

限りなき涙の露やかゝるらむそのふのむしの音さへさびしき

寄 盃 懐 舊

さきくさの三の盃とるたびにはづかしかりしむかしをぞ思ふ

寄 月 懐 舊

紅葉にも花にもよしと語りつゝ月に更かしゝ夜半もありしを

寄 真 綿 懐 舊

白妙のこの絹綿をわきも子がかほにかつぎしむかしこひしも

豊田養魚所にて

この池のあるじのひろきこゝろには住みよかるらむ鯉も鰻も

さちふかき池にひそみて大君の御膳ごぜんにのぼるときや待つらむ
鯉を献上する折

きさらづの池にそだちて大君のおもののにのぼる鯉ぞさちある
水清き御園のいけにはなたれて鯉もひれ振るときは來にけり

共調

たくみなる小唄のふしに糸たけの音色も更にはえまさりけり

祭祀

かみつよののりを守りてとこしへに厚く祭らむとほつみ親を
をさな子達が遊びたはるゝを見て

若返る事のかなはば茶目と呼び小茶目といひて遊ばむものを
をりにふれて

心とて見えやすくらむかたちなき聲にも角かどの立つ世なりせば

兎もすれば聲にも角のあるものを見えざらめやはひとの心の
目に見えぬ人の心も聲となりしわざとなりて世にぞ知らるゝ
世を棄て何にかはせん世の人にすてられぬ身となるが益良男えきらおとこ
世の中の人の數にも入らぬ身は住む家だにもえらばざりけり
人の身の事はかたれど明らかにおのれを知れる人ぞすくなき
國の爲め身をかへりみすいそしみてすゝむ道には關守もなし
一日だにながくいきむと朝夕にいのらぬ人の世にあらめやは
生存なごらへてあるかひなしと言はば云へ吾には親も妻も子もあり
浮世かな心は千々にくだけどもその一つだにいまだはたさず
いやしくもふみは違へずたらちねの親の教へと國のおきては

妻の腦溢血にて病みける折の苦吟 (大正一四)

身にあまる心づかひのかさなりておもき病の根ざしけるかな

とく癒えよわれにも子にもよく仕へよくいつくしむ妹が病は
言の葉の露にも見せぬ心根のふかくもいへにつくしけるかな
起たれずば助け起さむ歩めずば手をひき行かむ生きよわが爲

同 今後一年以内に限る命數と診断せられて

千とせもと思ひしものを一とせに限るよはひと聞くが悲しさ
明日知らぬ身とは思へど一とせに限ると聞きし時ぞまどへる
一とせに限るよはひと聞くからに吾身も生ける心地こそせね

同 更に三國手の立會診察の折

脈とりてまだよしあしも言はぬ間の醫師くすしの顔を見るぞ苦しき

同 前診誤れりと聞きて

神ならぬ身のあやまりといふ聲に思はず胸をなでおろしけり
さながらに神のみつげの心地して力つよさぞいやまさりける

同 折にふれて

おかへりといふ聲ひとつ足らずして家のおくまで木枯の吹く
老の坂越えむはかたし力ともつゑともたのむ身のなかりせば

同 朝夕按摩をしてつかはしける折

くつろげと朝夕さする肩腰のいたくしくもやせにけるかな

同 しばく悪夢におそはれければ

おそはれし夢におどろき病み臥せる妹が寝顔を又のぞきけり
さまざまに思ひ過していねし夜はゆめもおほかた涙なりけり
そら事と思ひながらもこのごろは胸をいたむる夢おほきかな

同 閻魔の廳に嫁入る夢のいと淋しかりければ

あでやかによそひこらせど婿君の花のすがたの見えぬ淋しさ

同 はなむけに

わが爲のなかばさゝげて仕へなばなさを惜む人や無からむ

同 婿たるべき君に

降るゆきのつもらばはらひなよ竹の直きこゝろを曲ぐな園守

同 懇切なる見舞をうくる度毎に

ねもごろに慰めらるゝ言の葉は病まぬこの身も嬉しかりけり
身にしみて嬉しきものはわづらひを慰めらるゝ言の葉にして

同 社用もだしがたくくす師にまかせ

おきて旅する折病む人に

世話やかすからだつかはず病む時は心静かにいえむ日を待て

同 山中温泉に宿りて

往きかひの道やすからばともに来て妹が病はいやさんものを

同 会社より通信の中に日々快しとありければ

こゝろよしといふ言の葉は鶯の初音にましてうれしかりけり

同 病やゝ怠りたれば

大雪にたわみし竹を春かせの吹きおこしたるときのうれしさ
この家をまもる爲には一日だになくてかなはぬ妻戸なりけり
老の坂ともに越えばや妹とよび背といふ聲をつゑちからにて

薬 効

力あるひとによりてぞかぎりなき薬のきゝめ世に知られける

主治醫の君に

逝かんかと思ひなやみし妹が身もよみがへりけりきみの力に

いよいよよくなると聞きて

よくなるといふ言の葉に花さきて春めきわたる家のうちかな

哀 傷

明治天皇の御平癒を祈り奉りて (明治四五)

大君の御代よろつ代を天地のかみまもりませたまにかはりて

明治天皇崩御

驚きのあまりにしばし哀しともうしとも物は言はれざりけり
天地ときばみなき世を統べまし君の八千代も限りあるかな
軒ごとに仰ぐ朝日の御旗にもうれたきくものかゝるさびしさ
千萬の民のなげきのかすくを見そなはずらむ雲のうへにて
同 靈柩を奉送して
牛のひく大御車のきしるおとはふかくもきもにしみ渡りけり
折をりに仰ぎなれつるいでましををがむも今日を限りなる哉

大正 天皇崩御 (大正一五)

天津日のひかりかくれて國民の袖はなみだにかはく間もなし
天地の神をうごかすまごゝろもとほらぬ事のある世なりけり

同 靈柩を奉送して

かなしさを何にたとへむ再びは仰ぐよしなき今日のいでまし
久宮祐子内親王殿下の薨去を悼み奉りて (昭和三)

九重のくもるにひめしし玉をうばひし龍のうらめしきかな
かなしみの涙も暫しいでざりきたかしこさの胸にせまりて

春 哀 傷

散る花を惜みし人も末つひにをしまれて散る身となりけり
もろともに見ばやと植しわが庭の花も手向けとなりける哉
妻の病みける折

あはれなり病みつかれたる母を見て泣く幼子も笑ふうなるも

妻の逝きしをり (大正三)

朝夕に母はいづくとをさな子がなくこゑきけば胸ぞふたがる
數多きやかからつどへどなにとなくこゝろ淋しき家のうちかな
めゝしとや人は笑はむさりながらつきぬはおのが涙なりけり

大口麻子のみまかりしをいたみて

たらちねのをしへ草をもつみし身の朝の露と消えしはかなさ
玉の緒の絶ゆるいまはいふ人の言葉や神のみつけなるらむ

同 齋場にて

かなしみのきばみなるらむ玉串をさゝぐる親もうくる御霊も

近藤博士の逝きしをり

かけひろく榮えゆくべき老松をいかなる風の吹きたふしけむ

限りなき人の手向くるたきものゝ煙と消えしひとのはかなさ

愛兒をうしなへる人に

磨きあげし玉は碎けてはらわたをたつらむ君が上をしぞ思ふ

一人子をうしなへる友に

名も富もなにゝかはせん子寶の一人あらばときみはおもはむ
子寶のなきがかなしき名も富もおもふまゝなるきみが家にも

大口鯛二先生のみまかりし折

かゞやきし高根の月のかげ消えてこゝろさびしき敷島のみち
さゝげまつるこの榊葉を限りにてとはの別れとなるぞ悲しき
まなび子のなげきはつきす呼子鳥君呼びかへせたゞ一夜だに
夕月のかげかくろひてしきしまの道のしるべを誰にとはまし

同 百日祭に硯を

やまとふみ書くたびごとに偲ぶかな硯の海のふかきをしへを

同 一周年祭に寄露追懐

花におき月にみがきし白つゆの玉のひかりぞしのばれにける

同 寄紅葉追懐

さらぬだにおもひで深きこの園に紅葉散らして時雨降るなり

同 五周年祭に墓前にて

うつせみの世をへだつるを如何にせむ語らむ事は數多あれ共
言の葉の道の奥つきとふ袖のつゆにぬれても散る木の葉かな

遺物を送られし時其父君に

うせし子の名を書く時はすぐれたる筆の力もにぶりましけむ

父のみまかりし折 (大正一一)

はらわたもちぎるゝといふ悲しみを初めて知りぬ父の別れに

父といひ子と呼はるゝも限りにてとはの別れに胸さけむとす
八十とせを越えたる父のありといひて多くの人に誇りし者を
今日よりは人に誇らんよしもなし身の幸とせし父はなくして
今もなほ笑めるが如きおもかげは何をか吾になほさとすらむ
世渡りの橋は危ふし心せよといはぬ日のなき父にてありしを

同 葬儀の日

はらわたを絞りにていづる血の涙そゝぎておくるけふの葬ハヤりに

追 懐

今宵又寝られぬまゝに起きいでゝみあかしあげつ父の御靈に
世の中にひとりたつ身となりて後はじめて知りぬ父の教へを
まのあたりうけし教へをくりかへし思出深き夜半にもある哉

俊才の夭折をしみて

さやかなる光をば世にはなつべき玉はもろくもなど碎けけむ
齋場にてほとゝぎすをきゝて

血をはきてなきやしつらむ時鳥はらわたにしむ今のひとこゑ
三谷軌一君の愛兒をうしなひしを悼みて

枝をため古葉はらひていたつきし君がこ松のいかで枯れけむ
内藤鳴雪翁の遠逝ををしみて

をしみてもなほあまりあり嵐にも雪にもたへし松の枯れしは
藤岡博士の追悼會に

世につくし人にをしへしかすくの君が勳をしのお夜半かな
電球王新莊吉生君の追悼會に

善につけ悪きにつけてさす竹の君在らばやと言はぬ日ぞなき
惜みてもかへらぬことをくりかへし偲ぶは君がありし世の事

年ごとに光をましてよを照らすたまこそ君のかたみなりけれ

東京電燈會社々長神戸舉一君の追悼會に

世のなかにたてし勳のそれのみか友にも厚き君にて有りしを
後の世の人のをしへとなるばかり積みしさをぞ世の鑑なる
世にたてしいさをのあとを語りあひて深くも君を偲ぶ夜半哉
故人の寫眞に向ひて

今はなき人とも見えすまのあたり語らふ聲も聞くこゝちして
追 懷

寄 子 追 懷

思ひ出の深き夜半かななつかしき君かおもわを見る心地して
人の子を見るたびごとに逝きし子のとしをかぞふる親心かな
この春も櫻は咲けどかた言にほめしうなるは世にあらずして

父の年回に

去るものは日々にうとしと誰か言ふ年経るまゝに父ぞ戀しき

位記追叙せられし奉告祭に

雲るまで聞えあげむ世につくし人にをしへし君がいさをは

母の永眠しける折 (八十五才) (昭和二)

大御喪のなみだに朽ちむ袖のまた重ねて濡れぬ母のわかれに
うち笑みて語らむ様にみゆれ共同へど答へぬ身となりにけり
法の師のみちびく國にたゞひとり旅だつきまに胸さけんとす
もろくの思ひ出おほく見にくもとり亂しけり母の葬りに

大倉鶴彦翁勳一等の靈前に (昭和三)

いさましく雲るかけりしまな鶴の千代も限りとなるか哀しさ

祝

天長節

日の御旗たて、祝はぬ家ぞなき津々うらくの果のはてまで
天津日の御旗かゝげてすべらきの御代萬代といはひかはしつ

東宮殿下の歐洲より御歸朝を祝ひ奉りて (大正一〇)

海の底雲のうへまでよろこびのこゑぞどよめくやまとくに原
心なき草にも木にもよろこびのいろぞみちたる日の本津くに
皇國のよろこびのみかとお國のみかども民もほきはしつゝ

英國皇太子殿下に奉る

見そなはせ我日本の本は草も木も花咲きいで、待ちたてまつる

東宮殿下御慶事祝賀會の日の歌ども (大正一三)

高光る日つぎの御子を仰がむと朝まだきよりひとのなみたつ
皇子すめみこのみいづに似たり久かたの大そらたかくひらくはな火は
まのあたり仰ぎ見るだにかしこきを玉の御聲の膽にしみける
酒のむものまぬも今日はほどくにいはいはひ盃あげぬ身はなし
をさな子が振るや旭の旗かせにうちなびかなむ四方の民くさ
皇孫御降誕ましませし折宮城前にて

日の小旗手に持つ子等の人垣はやがて御國のかためなるべし
祝

年ごとに千代萬代をいくたびもかさねかさねていはふ御代哉
限りなき竹の園生のみさかえはやかてみくにの榮えなりけり
大倉鶴彦男の米壽祝賀記念傳記をよみて

この文は世をうきものといたづらに老い行く人の樂なるべし

田男爵が樞密顧問官に任せられしを祝ひて

位山いよくたかし國のためたてしいさをのつもりつもりて

電氣新報一千號の祝に

底力つよき言葉のはなにこそ世をとますべき實はむすぶらめ

明治廿八年五月卅日征清軍凱旋して

大元帥陛下還幸ましませし日恭奉祝聖代

二つなくてつきせぬものは天津日とわが大君の御代となり梟

京釜鐵道會社の創立を祝ひて

もろこしの山の奥まで君が代はかな路いよく開けゆくべし

虎の伏すくだらの山も遠からず吉野さくらや咲きにほふらむ

鹿野山の開伐式に

斧のおと高くぞひやく鹿野山のたからのくらは今ひらくらむ

大日本歌道奨励會の十週年に

年ごとにかげのひろくもなりにけり歌の林のしげりあひつゝ

友人の代議士に當選せし折

國の爲めひたすらつくせいさましく勝鬨あげしますら男の友

同 商業會議所議員に當選せし折

言の葉の花さく場におりたちてさらにつちかへ實を結ぶまで

學位をさづかりたる友に

深みどりいよゝ繁りてとしんゝにひろくなりゆく園の松かけ

天賜金盃祝といふに

たまものゝみさかづきこそ國の爲めたてしいさをの光也けれ

電氣新報の記念號を祝ひて

ちからある筆のはやしに咲く花は實を結ぶまでいや榮えなむ

勅題松上鶴預選の榮を得たる坂本芳子が

千草會員ときゝて

久かたの雲の松にひゞくまで田鶴が音たかし八千草のその

尾上梅幸が一子榮三郎丈の襲名を祝ひて

音羽やま尾上の小松としんゝにおや木と共にたちさかえゆけ

東京電氣社長に就任せる新莊大人に

まごゝろをこめてみがきし白玉の光に知るしきみがちからは

藤岡博士銅像の除幕式に

とこしへにかくて仰がむいなづまの光かゞやく君がいさをを

電氣界に貢献せし米人に叙勳の折

あめりかの花のみやこにほこらなむこの日の本にたてし勳を

友人の男子出生を祝ひて

年どしに枝しげりゆく松かげにひとこゑたかし千代のひな鶴

岩崎大人の同上

千とせ經む色こそ見ゆれいそぎきの巖に根ざす松のふた葉に

歐洲大戦講和條約調印の日 (大正八)

たゝかひの雲をさまりて天の下どよめきわたるよろこびの聲

戦捷

むら雲は吹きはらはれて朝日さす旗手にひびく勝どきのこゑ

韓國合併をことほぎて (明治四三)

天津日のひかりをうけてもろこしの山の草木もいや繁るらむ

大倉組の新築落成の日

大内山かしこく仰ぐたかどのは安房も上總も目のまへにして

第百銀行の新築を祝ひて

限りなき御國の富をゆるがざるこのいしずゑの上に積まなむ

藤倉電線工場の落成を祝ひて

さまさまのわざを加へてはりがねの長き榮えの見ゆる場ばかな

大倉男爵の金婚式の賀に

妹背やまこがねの花のさかづきをかさねていはふ千代の友鶴

三夫婦揃ひたる金岡家の幸をことほぎて

金岡の松の大木のかげしめてつばさつくろふ千代のともつる

老松もこ松もともにさかえけりみどりいろよき枝をつらねて

父母の金婚式に (明治四三)

並びたつ園のさくらの花かげに鳥もうたへり千代のほきごと

人みなのもぐみの露の深みどり千代のさかえの見ゆる老まつ

さくら花うつるこがねのさかづきに老いぬ藥を酌むぞ嬉しき

高砂のおきなおうなのよはひまでむつびかはして經ませ父母

同じ折數多き祝歌をよせられければ

我が身までほきうたはるゝ心地して幸ある親をもつぞ嬉しき
うるはしき玉のこと葉のかゞやきて草のいほりも光そひけり
新婚の賀に鶯宿梅といふこゝろを

くれたけのはやしをいでし鶯はいまやどるらむうめの園生に

立川廣君の新婚をいはひて

和田津海の廣き榮えを立川のきよきながれのすゑにこそ見ゆ

新婚をいはひてよめる歌ども

高砂の松の千とせのとも鶴は世のなみかせは知らじとぞ思ふ
親につかへ子をいつくしみ睦みあふ妹脊よりこそ國も榮えめ
高砂の松吹く風もおだやかにねぐらさだむる千代のともつる

二葉よりよろづ代經なむいろ見えてみどりこまかき相生の松
相生の松かげしめてひなつるの初こゑきかんとときぞ待たるゝ

新郎 新婦 に

家の爲め世の爲めつくせ末ながく妹脊のちぎり結びかためて
如何ならむ事にあひても妹と呼び脊といふ聲を聞きな違へそ

實踐女學校長下田歌子刀自の年賀に

をしへ子をみちびきながらやすらかに南の山にのぼる君かな

周布公平(勳一等)が古稀の賀に (大正九)

世に高きいさをのみかは古もいまもまれなりきみがよはひは

加藤木大人の古稀の賀に

稀なりとむかしはいひし七十路をまだ若しとや君はおもはむ

人の還暦の賀に

みどり子の昔にかへり六十とせのはるをいくらか君は重ねむ
千とせ經む園生の松は六十とせの春たつごとに若みどりせむ

父の古稀の賀に

七十路のよはひの上にかさねませ百とせあまりはたち五とせ

父の喜壽の賀に

なゝそちの上になゝとせ重ねても千代經む松はいや榮えつゝ

父の八十の賀に

嬉しくも千とせの色の節ごとにこもりて見ゆるそのゝくれ竹

大食男爵の米歳の賀に

(大正一三)

大倉にあふるゝ米のかぎりなき數こそきみがよはひなるらめ
君が爲め又百とせのほぎごとを共に聞くべき日こそ待たるれ

星野親子の宮仕へを祝ひて

九重の奥ゆかしくもにほふらむふゆごもりせし花はひらけて

長男敏胤が足の病いえける折

なには江のあしの病もやゝいえてまなびの園にかよふ嬉しさ

會津電燈會社戸の口堰發電所の落成を祝いて

奥ふかき戸のくちせきも開かれて世をうるほさむ富の流れは

寄 鶴 祝

久かたの雲るにかけるあし田鶴のはるかに見ゆる君が千代哉
古も稀なるきみが御代にあひて鶴ものどかに千代や經ぬらむ

寄 松 祝

君をこそ千とせの友とちぎるらめさかえひさしきそのゝ老松

寄 杖 祝

たまものゝ杖をちからに位山なほのぼりつゝ世につくさなむ

電氣倶楽部の開館式に (昭和二)

今よりは此處を根城に國のため共につくさむちからあはせて

熱海露木旅館(香露館)の浴槽開きに (昭和三)

香ぐはしき花の露木のくすり湯に心あらはむおもわかきも

羈 旅

伊勢大廟に参拜の折

神風の伊勢の宮居ををろがみておのれにかへる心地せしかな
おのつからをさな心になりにけり伊勢の宮居をふし拜みつゝ
何となく心きよくぞなりにける伊勢の宮居にぬかづきしより
五十鈴川かじかの聲もさやかなり御垣のはなのうつる流れに

伏見稻荷にまうでゝ

朝まうであなすがくし御論しをかゝぶる如き心地せられて

出雲大社に詣でゝ

玉ちはふ出雲の神の大まへにたちしこゝろをつねに持たばや
大前にぬかづくほどのこゝろもてたゞしき道を人も踏まなむ

京都加茂神社に詣で、

かげふかきたゞすの杜の玉垣のあかきぞ民のこゝろなるべき
旅

おもしろき事のみ多しにしへの旅はつらしと傳へ聞きしが
旅すればおもしろからぬ處なし行くさきくゞに様のかはりて
旅館

隔てなくもてなされてぞ旅やかた晝のつかれもうち忘れつゝ

旅館にて

おもしろく夜を更かしけり旅やかた時めく友と泊りあはせて

熱海錦浦にて

仇なみはうちよるやがてくだけゝりにしきが浦の兜いは根に
東山温泉にて

病み臥せる妹とかはりて見まくほしや身の養なひの薬湯の宿

吉野にて (以下春の部)

吉野川さばしる鮎も見ゆるかな六田のよどのはなのなみまに

宇治にて

又さらにつとめ勵まむ宇治川の清きながれにうさをあらひて

宇治浮舟園のあるじに

言の葉の花のともがきたづね来て櫻のかげにかたるたのしさ

早春大阪より歸途

歸るさに訪はましものを月の瀬の梅は未しと聞くぞほいなき

青森縣電気協會懇親會場弘前公園の花

盛なりければ

いにしへのとりでのあとの松かげに大和心のはなぞにほへる

同縣知事の講演に對して

諸共につとめはげまむあがた守る君の教へをちからにはして

福島縣電氣協會場若松公會堂の門の右左より

梅櫻の枝さしかはし花さかりなりければ

右は梅ひだりはさくらこの門の奥ゆかしくもかたりかはさむ

同 懇親會に

この花は折るも散らすもまゝなりともてなし厚き宴なるかな

この集會やがて御國を富ますべしモラトリアムの風は物かは

八戸町橋本邸にて先代櫻園大人の碑文をみて

かぐはしきはなのこゝろも咲きいでゝ櫻の園の奥ぞゆかしき

言の葉のはなもにほひてのどかなり櫻の岡のひろきやかたに

同 臨池亭にて

咲きつゞく園のさくらの水かゞみ池の底までうつるさやけさ

首夏陸奥に旅しける折百花競妍を詠めと

友の強ければ戯れに

梅、さくら、桃、梨、あんず、玉つばき、つゝじ、やまぶき、はなさかりなり

朝の汽車にて (以下夏の部)

出そろひし麥の穂末をわたりくるかせこゝちよき朝の汽車哉

會津東山にて

暮れ行きしみやこの春や宿るらむこゝは櫻のはなさかりなり

同 向瀧にやどりて

藥湯に身をやしなひの旅やかたもてなしぶりぞ嬉しかりける

まごゝろをこめたるあつきもてなしは藥湯よりも心地よき哉

東山いで湯はあれどまどちかきわか葉にそゝく雨のつめたさ

諏訪湖畔にて

さみだれの雲面白し諏訪の湖めぐるたか根の見えがくれして

九洲四山炭坑にて

なつかしき名も有明の海に來て不知火かけを見ぬぞほいなき

首夏津輕富士を見て

高根には雪つもれどもふもとには霞たなびきはなさかりなり

駿河なる不二の高根に似たりけり山のすがたもつもるみ雪も

汽車の中に月のさしければ

矢の如く走るくるまのまどのうちのうちにさすかけすゞし弓張の月

汽車にて琵琶湖のほとりを過る折

ほのぼのと明けはなれゆく湖のうへよりわたる風のすゞしさ

大阪より歸途

事なりてわが家に急ぐ旅ころも吹く風さへもすゞしかりけり

日光の馬返しにて

汗はみし馬をかへして乗りこゝちよき車にてたきめぐりする

同 屏風岩

すさび行くうき世の風はこの岩の奥には入るを許さざるらむ

同 白雲瀧

九十九折のぼりつくして見おろせばしたにかゝれり白雲の瀧

同 中禪寺湖にて古河鑛業所の款待をうけて

おもひきやこの湖の底よりもふかきもてなしけふうけんとは

同 湖畔にて

くもりなき鏡に似たるみづうみにすゞしくうつる二荒のやま

同 舟遊して

二荒のやまさへうつるみづうみに夏は乗せざる舟あそびかな

同 湖畔に時鳥を聞きて

めづらしき都の人のもてなしに夜たゞなくらむ山ほとゝぎす
世がたりもしばしやみけり時鳥軒をかすめて鳴きすぎしより
世の事を忘るゝのみもうれしきを歌の濱邊に鳴くほとゝぎす

東北地方に旅しける折よめる歌ども

夢の間にはやみちのくにつきにけり汽車は都をよひに出しも
乗り合の人もあつさにうみはてゝしばしはやみぬ浮世語りも

横手町の旅館にて

かじか鳴く朝日かは邊の旅やかた晝もあつさは宿さざりけり

機織驛にて

をさのごとゆきかふ汽車に乗りかへの旅人多しはたおりの驛

十和田湖めぐりの折大湯温泉にて (大正二二)

しばらくは重荷おろして明日は又さらのぼらむ老の坂みち

山路にて

奥山のつめたき風をひと日だにみやこ大路にふかせてしがな

十和田湖にて

古びたる小松の様ぞおもしろきそばたつ岩に根ざしかためて
淵となれる深さ知られぬみづうみのおもてを渡る風の冷たさ
湯かたびらかさね著しても肌寒し十和田のうみの夏の夕ぐれ
高砂もよもぎが島もまのあたりこゝにあつめて見る心地する

同 奥入瀬の仙境を

千早振神代のさまぞしのぼるゝふるき木立にきよきながれに
苦むして神代ながらにふるびたるさまおもしろし岩も流れも

ひめられし神の御苑もひらかれてわけいる谷の奥ぞゆかしき
箱根の歌のうちに

蔭くらくしげる青葉をゆすりくる箱根の奥のかせのすゞしき
箱根やま青葉のとざす關の戸は夏をも入れぬところなりけり
世の夏を入れぬ處となりにけり青葉をぐらくとざすはこ根は
舟にて芦の湖を渡るをり

山籠も小ぶねに乗せてうみ渡る箱根めぐりのおもしろきかな
長らしき人と里人のかたるを聞きて

里人の言葉つかひのうちにだに身のほどくの見ゆる床しさ
浅虫海岸にて

涼し氣に見ゆる濱邊も日ざかりはあまの子供の影だにもなし
同 裸島を

波にうたれ風にさらされその名さへ聞くも涼しきこの裸しま

朝の汽車にて白河を過る折

なごりなくさざりははれて心地よくあけはなれゆく白河の關

鹽原御用邸にまう上りて

まへに川うしろに山をめぐらしてなつのあつさはいれぬ高殿

同じ折かしこき若公の山めぐりの御ともに

たちしにいとあつかりければ戯れに

若公のくる髪山をあふぎ見ればあせこそまづは瀧とながるれ

同 はゝき川を

みなもとは昔の清水か玉のごとすみてながるゝ音のすゞしさ

同 歸京の時のせまりける折

いで湯あみ瀧見めぐりて今しばし慰まましをつとめある身は

同 いで立つ時

更にまた友と遊ばむのこりなく谷もたかねもそめわたすころ

那須野原の七草を

風きりてはするくるまの右ひだりなゝくさ咲けり西那須野原
さらぬだに風ぞ身にしむ秋の野にさびしくまねぐ薄かるかや

鑛區視察の爲苗場山にのぼりし折の歌ども

谷ふかくなりゆくまゝに岩をかむ水おとたかし越のやまなか
いそげども馬も車もかよはざる道になづみて日はくれにけり

同 人跡なき山間溪谷を辿り幾度も進退に窮

しけるをり

けものだに通ふ跡なき岩かどを越えむとすれば足ぞすくめる

同 峰にいでて九死に一生を得たる心地せし折

ものすごき木の根岩かどふみこえて思ふ高根に出しうれしさ
思はずも手をうちあひて喜びぬたゞ名ばかりの道見いでつゝ
今過ぎしふもとの里はかくれけり足のもとより雲のおこりて
そことだにふもとは見えす何時の間に雲の上まで身は登り劔

同 苗場山にて (海拔六千四百尺)

世の夏の外にたつらむ苗場山いまぞさくらのさかりなりける

同 視察を遂げて下山の道すがら

熊の住む深山の奥も國のためいへのためにはなにいとふべき

八戸町橋本氏に誘はれ中村氏と共に再び十和田

湖遊覧の折洪水の爲橋落ち行惱みて(大正一四)

物すごく水はさかまき橋は落ちゆくてはとほく日は暮んとす
道づれば皆若手にて山のぼりたにわたりにはおくれけるかな

日は暮れてゆくては遠し橋はなしいかゞはすべき友の一つれ

同 迎ひの男に助けられ葛の湯に著きて

つらかりし事もたちまち忘れけり浮世ばなれのしたる出湯に

同 葛の湯の朝

苔青きかけ樋をつたふ山水のおともしづかに明けはなれゆく

苔桃をあぢはひながら三千とせのよはひをのべん葛の湯の宿

同 奥入瀬の仙境に入らんとせしに道の潰えた

る處あり自動車通らず各自手傳ひ繕ひければ

道ぶしん社長専務も加はりていしはこびするかみまうでかな

同 奥入瀬の仙境にて

苔深き木の根岩がねあらひゆく水やうきよのほかになすむらむ

神さびて苔ぞむしたる天津日のひかりに遠きおいらせのたに

みなもとは神代ながらの苔清水すゑのながれも濁らざりけり

同 阿修羅の流れを

さからへばかゞみの如き清き瀬も阿修羅の淵とかはる世の様

同 雲井の瀧を

宮人になるこゝ地せり久かたの雲ゐのたきのしぶきかゝりて

同 世界公園

とつ國に誇るにたれり陸奥の十和田のうみと不二のたか根は

同 千丈幕を

いかめしきとばりの奥や十和田湖の神のまします處なるらむ

同 湖水めぐりの折

高砂やつゞみがうらもうら越えて蓬がしまのふなあそびかな

同 夕

おだやかに日は暮れそめて湖も山もねぶりにつくこゝちする

同 朝

秘められし神のとばりの静かにも明けはなれゆく朝心地よし

同 橋本大人に

残りなくしるべせられて奥入瀬の溪の奥まできはめけるかな
年ごろの望みも足りてはゞきぬき語らひかはす夜半の樂しさ

同 鮫港石田屋にて小宴の折

涼しくも更け行くまゝに様かへて波間にしづむみじか夜の月
みじか夜の月の波間にしづむまで語り更かしぬあつさ忘れて
うみやまのもてなしのみか扇浦吹きくる風もすすしかりけり

逗 子 に て

よせかへす波の音さへしづかなることゝに一夏おくりてしがな

手を打ちて呼ばゞこたへむ江の島も不二の高根も窓近くして
夏草の事しげき世をのがれ来てこゝに遊ばむひと日ふつ日は

同 女子の水泳をみて

あまならぬをとめのむれも夕なぎに抜手をきりて水泳ぎする

伊 香 保 に て

伊香保やま遠くながるゝ溪水にうき世の夢をながしつるかな

孫子等を筑紫に訪ひてかへるさ

訪ふ時のその樂しみにひきかへてこゝろさびしく歸る旅かな

八幡製鐵所のあたりにて

まがね吹く烟はそらにうづまきて日かげも遠き心地せらるゝ

越後高田ホテルにて午前二時頃夢におそはれて

老ぬれば目さめ勝なり夢の間も妻子のうへにこゝろおかれて

牧田環君の箱根の別荘を訪ひて

訪ふ人の絶え間なきかな世の塵を避けてかまへし館ならめど

別府の伊藤傳右衛門氏の別荘にて

しばしだにこゝに心をやしなはむ見る目もひろきいその高殿

富山にて製薬工場參觀の折神樂を

千萬の人もすくはむ神のごときゝめたゞしきこのくすりもて

同 清涼劑を

わづらへる人のみならず病なき身をも養なふくすりなるらむ

秋 旅 (以下秋の部)

そめわたす高根の紅葉居ながらに汽車の窓より見る旅路かな

大阪にて水害の慘狀を見て

まなびやもわが家も水にひたされて子等はまどへり淀の堤に

舟ならで通ふ方なくなりにけり伏見のさとはみづにひたりて

山科にて茸狩しける折

かくれ家の名もかぐはしき山しなに狩り暮しけり茸も紅葉も

會津地方にて

もとむれば心やすくもゆるされて手折るがうれし柿のひと枝

朝きりのたつがまにく窓ちかく見ゆる高根の様かはりゆく

マツダ助成會員の見學旅行の折の歌ども

氣つかはれし雨の晴れたれば

かゝりつる心のおくの浮雲も晴れわたりたるやまめぐりかな

秋晴いと暑く三里に餘る山路待たれてはと

人のいひければ

暇へあげし老のからだをためし見む若きに交り野踏み山越え

終に耐へがたくおのれ一人車に乗りて

いざといへば行き悩みけり老の坂心ばかりはおくれざりしも

同 伊香保路にて

秋くさの花咲く野路を思ふどち袖をつらねて行くがたのしさ

同 たそがれ時

七草のはなのなかゆく旅ころも袖もころもすゞしかりけり

同 伊香保の湯の宿にて

つれは皆ころへだてぬ友にして語らひかはす夜半の楽しさ

いざといへばたすけあふべき友どちの力やしなふ今日の旅哉

さらぬだに親みふかき真心のあらはれけりな今日のまとるに

同 見晴し山にて

ふもとよりむらだつ雲ぞおもしろきこの見晴しの山に登れば

同 物開山にて

いざしばしころにいこはむ蟬しぐれ耳にすゞしき物きゝの山

同 伊香保の朝

朝きりのたつがまにく連なれる赤城の峰の見えかくれする

連なれる赤城の峰も見えそめて明けはなれゆく朝しづかなり

暁のまどにせまりて大なみのよするがごとしつゞくたか根は

湯あみしてまたも夢路に入りにけり老は山にも登りがたくて

同 歸途につくとて

おもしろし樂しといひし旅やかた今ひと日とも思ほゆるかな

同 幹事の方々に

さまくの心つくしのあらはれて足りぬといはぬ人なかり鳧

中秋保津川下りの折

野菊咲く岸に小舟をつながせて茸狩りくらす今日のたのしさ
物すごき早瀬乗り切る舟びとのいのちやほそき水掉なるらむ
一筋のほそき水掉のさばきにて早瀬乗り切る保津のかはふね
いさましゝさかまく水をのり切りて岩間をくだる保根の川舟

鹽原にもものしける折よめる歌のうちに

見返りの橋にくるまを乗りすてゝ行く人おほし紅葉めでつゝ
まばゆくも紅葉そめざるかたぞなき見おろす谷も仰ぐ高根も
見ぬ友に語らまほしく思へども紅葉にかへむことの葉ぞなき
瀧つせのおとも聞えてうるはしき紅葉の谷のおくぞゆかしき
紅葉狩枝をかざゝぬものぞなきをらば咎めのありと知りつゝ

同 大さかづきといふ紅葉を

酒くむも酌まぬもなべて紅葉がり大さかづきの色に酔ひつゝ

同 關谷にて

秋深き關谷の奥は見えねどももみちかざゝぬひとなかりけり
逗子にてよめるうちに

世のなかのうさをわすれて遊びけり晝ははせつり夜は月見て
夕霧はくまなくはれてうなばらのはてまで澄める秋の夜の月
松が枝をもりくる月も松蟲のこゑもすみゆくあきの夜半かな
櫻やまはなの時にはあはねどもまつかせすゝし月さやかにて
松蟲のこゑ聞きながら松ばらの葉ごしの月を見るぞすゝしき
夕月のかげもさすなり松蟲のこゑもすゝしきいそのまつばら
いざゝらば今日はかへりて櫻山かさねて訪はむ花の咲くころ
箱根にて

萩も咲き尾花もまねく箱根路の旅おもしろしかごにゆられて

仰ぎ見る箱根の宮居かげたかく月すみわたるあしのみづうみ
紅葉にはまだ四日五日はや川の水おとさびしひとりたびにて
玉くしげ箱根の紅葉そめいでぬつばみまじりの花のごとくに

粟津にて晴嵐を

なごりなくさざりは晴れて小波の粟津のさとに松かせぞ吹く

唐崎の老松を

年経たる只ひともとのそなれ松はやしのごとくなほ榮えつゝ

有馬にて茸狩の折

茸がりの山に見いでし初もみち折りてみやこの友にはこらむ
薬湯に身をやしなひて明日よりは共に勵まむおのがつとめを

秋田縣横手町の旅館にて

音もなくすみで流るゝ朝日かは岸のもみちのかげをうつして

北陸地方にて

走り行く越路の汽車の右ひだりはな咲きつゞくあきのなな草

震災後の旅にて

夜を晝につぎて歸らむ紅葉ばの色もてはやす秋にしあらねば

兵庫にて煩はしき事ありける折 (以下冬の部)

たえまなくよせ来る波の音さえて身にしみわたる須磨の夜嵐
須磨の浦よせてはかへすあだ波の千々に碎くるわが思ひかな

同 交渉事の解決しける折

さわぎつる和田の岬のあだ波もなぎ渡りたる夜半のしづけさ

夜汽車にて北陸地方に旅しける又の朝

月のかげ踏みてみやこはいでしかと思ひもかけぬけさの大雪
植込の竹も小松もおもしろく降りこそつもれこしのはつゆき

うす墨をながせるごとき雲とちて時雨ふり來ぬ越のうまや路

城の崎温泉にて

湯の山の松ふく風もをさまりて夢しづかなるたびやかたかな

山陰道地方にて

出雲路は昨日も今日も雪降りて汽車もおほかたおくれがち也
乗り合の人をのこらず友として雪見がてらの汽車のながたび

汽車中船上山を望みて

つらなれる峯の中にも船上のやまのくらのぞたかく見えける

天橋立にて礮清水を

神垣の松のしたつゆおちそひて玉よりきよしいその眞しみづ

同 實景を歌ひあげかねて

言の葉の浅き根ざしをくゆるかなこゝろに思ふ花もにははで

音信應對

旅すといひしに行く先々より歌詠みておく

れといはれければ

歌よみて送れとしゆる言の葉はトランクよりも重荷なりけり

この片荷ともに持ちゆく赤帽の一人もがなとおもほゆるかな

よしさらばこゝろみのため言の葉の一葉一葉を分けて送らむ

同 諏訪の曉

白銀のかゞみのごときみづうみに黒くうつれりあかつきの山

同 諏訪明神に参拜せんとて

祈ることありもあらずも湯あみして朝まうでせむ諏訪の大神

同 姨捨山のほとりにて

姨すての名こそ悪くけれ都路に子をすてる親はある世なれ共

同 川中島を過る時

古のいくさのあとぞしのばるゝかはなかじまの夏のゆふぐれ

同 越後路にて

ふもとは若葉しげりて高根には雪なほしろしくろひめの山

同 北陸線にて

はてもなくなぎ渡りたる海原につゞく帆影のさまかはりゆく

乗る汽車は青海ばらを右に見て越のしら根のふもとをぞゆく

こゝも又高根にみゆき山の尾はつゝじうつ木の花さかりなり

同 親不知にて

親知らず子しらすの名は昔にて今は寝ながらゆきかよひつゝ

同 七尾線にて敷波千々といふ驛の名の並

び書かれあるを見て

歌よめときみにいはれて敷波の千々にこゝろを碎きつゝゆく

同 汽車にて

旅すれば目さきかはりて面白し重荷負ひつゝ行く身なれども

今此處に明日は宮津へひとり旅かたらむ友のなきぞさびしき

同 沿線田植さかりなりければ

早乙女のあかきたすきもはえにけり植ゑわたしゆく苗の緑に

おもしろくうたひはやして早乙女の植るや富の早苗なるらむ

同 二度と行くまい丹後の宮津といふ俗謠

を聞きて

此處にのみ限るべしやはよこしまの財布は満たぬ世の慣ひ也

同 震災直後の天橋立にて

天地の神や守りけむ大地震のあとかたもなきあまのはしだて
言の葉の花さく君をいざなひてかさねて訪はむ月のよきころ

同 磯清水を

橋立の松のしづくのおちそひてみどりにすめる磯のましみづ

同 京都をいでたつ時

わづらひてまつ友なくば今ひと日親しましを加茂の川邊に

同 歸途

病む友の上を思へば旅ごろも日をかさねしぞほいなかりける
老が身にあまる重荷をおろしつゝ袂すゝしくかへるたびかな
このごろは内外の事の多くして往きも復りも夜汽車なりけり

同 腰折にて責ふさぎせるをわびて

ゆるさなむ其名も知らで摘み送る言の葉草はいふせからめど

四十年前小學校にて教へをうけし舊師を訪

ひし折の歌ども

なつかしき君のおもわを見し時は飛立つばかり嬉しかりけり
年ごろの望みをとげていまこゝに君とたゞちにかたる楽しさ
物おぼえわるしと君に笑はれてなみだながしゝ事もありしを
人の名もわするゝまでに老ぬれど君の教へはなほまもりつゝ
ながいきはすべきもの也なつかしき昔の人も訪ひつ訪はれつ
夏の日もなほながかれと思ふかな教への親子むかしがたりに
四十とせのむかしの事をまのあたり見る心地する物語りかな

同 別れに

諸共にやまひなきをば幸にしてしづかに越えむ老のさかみち
其後舊師よりおとづれを得て

なつかしき君のおとづれ得し時は夢よりさめし心地せしかな

家はいづくととひける人に (明治四〇)

わが庵は春は花咲き夏はまたわか葉にこもるあをやまのさと

名をあげたる人の父に

一すちにたてし望みをとげし子の時めく見るや樂しかるらむ

兩親にとて美事なる琵琶の實を送られければ

おのが身におくられしより嬉しきは親の身におく言の葉の露

故郷の父の上京せしといふ友に

いかばかり嬉しかるらんたらちねの親子樂しく語りあふ夜は

友人の米國に行くをおくりて

こゝろざす港にふねのつかむまでは波風たつな君がゆくてに

友を招くとして

我が庵はささやかなれど訪ひ來ませ春は花咲く青やまのさと

暑 中 友 に

草も木もうちしをれぬる日盛のあつさをいかに凌きますらむ

三室戸子爵より芦間を漕ぎいでし涼舟をゑ

がきたる端書をよせられければ

うつじゑを見るだに涼しやかた舟さしむかひなる人ならね共

佛事の爲に故郷に歸る人に

古里のはなもみちもこの秋は皆おもひでのたねとこそなれ

松茸にそへて友に

この茸はわづかなれどもおくるなり有馬の山の秋のしるしに

周布公平が返子の別莊にて病みける折訪ひ

來る人の多かりければ

しづかにもよせてはかへす白波の音づれ絶えず返子の海邊に
病おとろへたりと自ら筆とりていひおこせ
ければ

水ぐきのあとなつかしみ幾度もくり返しけり今朝のおとづれ

又(窓深くとちこもる身は望の夜の月の光を

見るよしもなし)といひおこせければ

來む月の月をめなむさやかなる月はこよひに限るべしやは

病のおこたりたるを見て

朝きりはくまなくはれて相摸の海見るめもひろく波しづか也

又(聞く主のなしと知らずやきりくすわが

庭草の露になくらん)といふかへし

病む君をなぐさめんとやきりざりす枕邊近く鳴きあかすらむ

伊香保温泉に病を養ひつゝある友に

心ゆくいで湯の宿に起き臥して身のいたつきもとく忘れなむ

後進者の爲に途を譲りて職を退きし浅野博

士に

つちかひし學びの園に咲く花をたのしむ君のこゝろかぐはし

新年子福者に

年ごとにつみかさねたる子寶のいやさかえゆく君がやどかな

暑中病める友に

恙なき身にもたへざる暑き日を病み臥す君は如何にか有らむ

御影に住める友に

峯の雲沖の白帆をともとしてたのしむきみぞうらやまれける

京都桂離宮にてよめりとして千葉寄人より(村

時雨ふるき都のもみぢ葉のさかりはすぎぬ
 みつくさずして)といひこされけるかへし
 秋深き御園の外のもみぢ葉を見つくさずとてなにかこつらむ
 熱海にもものしける折岩淵なる田中伯爵の邸
 にて歌まとるしつゝある友どちに

出湯よし見るめもひろし君きませ箱根を越えて伊豆の海邊に
 諸ともによはひのべんと薬湯に君をまつなり伊豆のさがみや
 富士川のいかだに乗りていで來ませ箱根の關の手形持たずば
 皆々さはりありて立寄らざりければ
 いざといへど否ともいはで來ぬ友は箱根の關を越えや兼らむ
 暑さいとはすやからのみとりすと聞きて
 いかばかり苦しがるらむ厚氷千々にくだきてつくすところは

箱根より都の友に

よろしくといふ人もなしおとづれもたえて久しき君を恨みて
 副島伯が京城日報を主宰すといひおこせし
 返し

つちかはゞ唐なでし子も敷島の大和ごゝろに咲かざらめやは
 つくしませ高麗野の末の民草もみいづの風にふしなびくまで
 病みつる友に

望の夜の月にも雲のかゝる世を病み臥すとてもなに嘆くらむ
 友人の渡米を送りて

敷島のやまと錦にとりそへてあめりかきぬをきてかへらなむ
 外國のふみの林に咲くはなを折りかざしつゝとくかへりませ
 松浦伯より日西海珠といふ水産に關する刷

巻をおくられければ

目のあたり見る心地せり和田津海のそこの寶も數をつくして
いざゝらば千尋のそこの寶庫ひらきつくさむおほ御代のため
おくられしこのすりまきをしるべにてとり盡してむ海の寶を

越後新發田より笠井博士に

岩によち木の根つたひて赤谷の奥に入りしはふたむかしなり

長尾電氣局長に

君ありてみやこ大路のゆきかひもいよ／＼安き心地せらるゝ
ゆきちがふ汽車にて別れし人に

いざといひてわかれをしむひまもなし汽車の烟の西に東に

汽車にて乗合の人に

玉くしげ箱根の山か江の島か聞かまくほしやきみがゆくへを

家はいづこと人のとひければ (大正一〇)

こゝの重のみやこの山手牛ごめの若松生ふるまちぞわがいほ

大倉男を箱根の別莊に訪ひしに石黒子爵よ

り龜を送られし返しにとて(鶴彦の旅宿に龜

を給はりぬこれは千萬ありがたきかな)とあ

りければ

蜂の松たにのいはほに鶴龜の千代よろづ代をしむるきみかな

又もてなしの珍菓若緑を

この澤に摘むぞうれしきその名さへ聞くもすゞしき若緑ぐさ

出雲の大神にまうでしに何を祈しやと人の

とひければ

木の芽煮て老を樂しむ友を持つこの身の更になにねがふべき
八雲たつ出雲の神の大まへにわがいのること知るひとやたれ

年 高 き 人 に

玉のごときよきこゝろを持つ君の千とせは神も守りますらむ

五十音をかしらにおきてよめる四季の歌

春の部

(ら行は末尾におきたるもあり)

あ。ら。か。は。の。つ。ゝ。み。の。櫻。さ。き。に。け。り。い。ざ。舟。う。け。て。一。日。あ。そ。ば。ん
い。つ。し。か。と。ま。た。れ。し。櫻。の。こ。り。な。く。さ。き。そ。ろ。ひ。け。り。芝。も。上。野。も
う。か。れ。さ。わ。ぐ。人。の。こ。ぬ。ま。に。上。野。山。花。の。奥。ま。で。わ。け。入。り。て。み。む
え。だ。な。ら。ず。風。も。な。く。し。て。吉。野。山。花。さ。か。り。な。り。た。に。も。を。の。へ。も
お。く。ふ。か。き。谷。よ。り。い。で。し。鶯。の。は。つ。ね。を。き。し。け。さ。の。う。れ。し。さ
か。ず。お。ほ。く。花。は。み。つ。れ。ど。よ。し。野。山。み。ね。の。櫻。に。ま。す。い。ろ。ぞ。な。き
き。え。の。こ。る。高。根。の。雪。も。お。の。づ。か。ら。の。ど。か。に。霞。む。春。の。あ。け。ぼ。の
く。れ。な。る。の。こ。ぞ。め。の。梅。の。は。な。か。げ。に。け。さ。も。き。て。な。く。鶯。の。こ。ゑ
け。ふ。は。ま。た。沙。干。か。り。し。て。た。の。し。ま。む。磯。の。櫻。も。と。ほ。く。な。が。め。て

こゝのへの雲の上までにはふらんみやこ大路の花のさかりは
さすたけの君をさそひてあすか山花のあたりにひと日遊ばん
しまかげも帆かげもみえずなりにけり海原遠くかすみ渡りて
すず菜さく春の山鳥わけゆけば小蝶とぶなりかなたこなたに
せきいれし苗代小田の水かゞみさやかにうつる花のかげかな
そぼぬれて櫻のいろもあせやせんをやみなくふる夜半の春雨
たちとまる人おほきかなわがかどのしだり櫻の花さきしより
ちりひとつみえぬ園生に色はえてさきほこりけり山吹のはな
つばなぬきわらびもをりて春の野にあそび暮しつ老も忘れて
てならひにかよふ山家のわらははべか家つとにをる初わらび哉
としどしに變りゆくよに櫻のみむかしながらの色香なりけり
なもしらぬ鳥の音もして里とほき深山の花のいろのさやけさ

には櫻さきいでにけりみやびなる友をまねぎて歌まとるせん
ぬば玉の夜の間に花はさきいでゝ園生ましろにみゆる朝かな
ねがはくは野守となりて一春をかすみのおくに暮してしがな
のどかにも霞たなびく山のはを照してさけりにつゝじのはな
はこねやまかすみにもる湯の宿ののきばになるゝ鶯のこゑ
ひばりたつ麥の畑のをちこちにまじる菜種のはなのさやけさ
ふるさとの昔をしのぶ花かげにかたらひかはすけふの樂しさ
へさきには櫻をさして柴ふねも深山のはるをのせてゆくみゆ
ほのぼのとあけゆく野邊に妻戀ふる雉ききの聲のたかくきこゆる
まどの戸は深くも花にとざゝれて賤が庵ともおもほえぬかな
みわたせば野にも山にも花さきて霞たなびくはるのどけさ
むらをさもなはしろ小田におりたちて水口祭りゆたねまく也

めづらしく一ふさゝける藤の花若むらさきのいろなつかしき
もれ出る月のひかりもおぼろげに霞みてみゆる花のしたかげ
やま吹の花のかき根の七重八重かこめる庵のうちぞゆかしき
いまひとたびをふねにのりて嵐山霞める峯のはなをめでばや
ゆきくれてわがやにいそぐ山里の花のしたみち月おぼろなり
えの島の波うちきはに貝拾ふ子等のそびらにちるさくらばな
よもすがらをやみなくふる春雨の散らしやすらんそのゝ櫻を
さかりなる花のかげよりかねの音のさやかに響く春の山てら
おぼろ夜の月かげふけて櫻花ちりうくいけにかはづなくなり
夕月夜おぼろにみゆる花かげに語らひかはすこゑぞきこゆる
花さそふ風もなくしてのどかにもかすみたなびく春の夕ぐれ
梅ちりて若草もゆるこの里はかさねてとはんさくらさくころ

わか草のまだのびたゝぬ春の野に小雨烟りてうぐひすのなく
るなか道右も左もおしなべてたか根のはなのいろのさやけさ
うちむれてよめなたんぼゝつみはやす様面白き春の野邊かな
ゑひ心地何にたとへむ花かげの草のむしろのけふのうたげは
をさな子の聲樂しげにきこゆなり霞める野邊にすみれつむ覽

夏の部

あをすだれ風にゆらるゝ折をりに奥まで見ゆる川ぞひのやど
いそやかたひとつはほしと思ふ哉みやこの夏のあつき盛りは
うめの實の折をり落る音はしてゆふべしづけきさみだれの宿
えの島のなみうちぎはの夕涼み昨日のひとにまたあひにけり
おぼしまもおほひて暗きかへるでの青葉揺りて蟬ぞなくなる
かげふかき松の林のしげみより吹きくる風ぞすゝしかりける

きのふまで降りつゞきつるさみだれにはひ廣ごれり庭の芝草
く。れ。竹。の。葉。末。に。む。す。ぶ。朝。つ。ゆ。の。玉。ゆ。り。こ。ぼ。す。か。せ。の。す。ゞ。し。さ
け。ふ。も。ま。た。あ。つ。さ。流。さん。苦。ふ。か。き。谷。間。の。清。水。む。す。び。あ。げ。つ。ゝ
こ。け。深。き。岩。根。を。め。ぐる。谷。水。は。目。に。見。る。だ。に。も。す。ゞ。し。か。り。け。り
さ。と。人。の。ひ。る。寝。の。床。も。す。え。ら。れ。て。森。の。こ。か。げ。ぞ。夏。は。よ。ろ。し。き
し。ほ。を。あ。み。砂。に。ま。み。れ。て。一。夏。を。こ。ゝ。に。す。ご。さん。我。身。と。も。が。な
す。ま。の。浦。よ。せ。て。は。か。へ。す。さ。ゝ。波。の。お。と。も。す。ゞ。し。き。夏。の。夕。ぐ。れ
せ。み。の。羽。の。薄。き。こ。ろ。も。の。寒。き。ま。で。涼。み。ふ。か。し。つ。加。茂。の。河。邊。に
そ。ば。ぬ。れ。て。土。に。つ。く。ま。で。た。わ。み。け。り。つ。ゆ。に。な。や。め。る。撫。子。の。花
た。き。の。お。と。も。近。く。き。こ。ゆる。山。か。げ。の。い。ほ。り。涼。し。き。夏。の。夜。の。月
ち。や。摘。み。歌。ひ。る。は。聞。え。し。宇。治。川。の。堤。に。ぎ。は。ふ。ほ。た。る。が。り。か。な
つ。き。き。よ。し。見。る。目。も。ひ。ろ。し。吹。き。か。よ。う。風。ま。た。す。ゞ。し。濱。の。松。原

て。る。月。の。ひ。か。り。も。ふ。か。く。ひ。き。い。れ。し。磯。館。こ。そ。す。ゞ。し。か。り。け。れ
と。も。し。火。に。家。を。守。ら。せ。て。人。は。み。な。門。す。ゞ。み。する。な。つ。の。夜。半。哉
な。つ。さ。れ。ば。深。山。の。奥。ぞ。な。つ。か。し。き。木。か。げ。つ。た。ひ。に。瀧。巡。り。し。て
に。ご。り。江。の。水。の。心。に。そ。ま。す。し。て。す。が。く。しく。も。蓮。の。は。な。さ。く
ぬ。ば。玉。の。く。ら。き。夜。道。の。ひ。と。り。た。び。照。ら。す。螢。ぞ。し。る。べ。な。り。け。る
ね。な。し。草。浮。き。て。流。る。ゝ。里。川。に。子。等。も。あ。つ。さ。を。あ。ら。ひ。け。る。か。な
の。き。の。鈴。す。ゞ。し。き。お。と。を。た。つ。る。か。な。竹。の。葉。分。の。風。に。ゆ。ら。れ。て
は。し。居。し。て。月。ま。ち。を。れ。ば。ほ。と。ゞ。ぎ。す。軒。を。か。す。め。て。な。き。渡。る。也
ひ。盛。り。の。あ。つ。さ。を。よ。き。し。若。竹。の。葉。ご。し。に。う。つ。る。月。の。す。ゞ。し。さ
ふ。ね。う。け。て。ひ。と。め。ぐ。り。せ。む。な。つ。の。夜。の。月。さ。や。か。な。る。あ。し。の。湖
へ。だ。て。な。き。田。中。の。さ。と。は。隣。よ。り。と。な。り。の。庭。に。ほ。た。る。と。よ。な。り
ほ。こ。り。が。に。う。な。る。は。家。に。か。へ。る。な。り。と。ら。へ。し。蟬。を。袖。に。包。み。て

まどの戸は蔦の若葉にとぢられて夏もかよはぬ山かげのいほ
みち芝の露ふみわけてうぶすなの神まうでせり夏のあけぼの
むしぼしにとりいだしたる古への文に向ひてよをおもふかな
めづらしき友にとはれておもしろくかたり明しつ夏の一夜を
もゝ草のしげみがくれに咲きいでゝ露おもげなる姫百合の花
やへ蔴茂るがまゝにまかせつるいほこそ夏は住みよかりけれ
いはばしる瀧のしぶきに谷合の風さへぬれてすゞしかりけり
ゆふされば涼しき風におくられて帆船入り来るみなと口かな
えだわたる風もとだえてあつき哉蚊の聲しげきなつの夕ぐれ
よもすがらかじかの聲を聞しかな加茂の川邊の旅やかたにて
汐風のたえずかよひて夏の日のあつさわするゝいその松ばら
水きよき加茂の川原の夕涼みひるのあつさはのこらざりけり

田草とるしづもひる寝のあふち原聲かしましく蟬ぞなくなる
瀧つばの底よりおこる谷風はさながらあきのこゝちこそすれ
かやり火の煙も細きしづが家の軒端いぶせきさみだれのころ
わらぶきの賤か軒端をすゞしげにおほひてさけり夕顔のはな
みなか家は夏こそよければひりより林のごとく青葉しげりて
うへ野山をぐらく茂る葉ざくらの奥にゆかしき物のねぞする
ゑをあさる雀も見えず日盛はすゞしきかげにこゑをひそめて
をさな子のひる寝の夢に通ふらん軒に来てなく蟬のもろこゑ

秋の部

あさ顔の花さきたりとわきも子によび起さるゝ秋は來にけり
いで湯よし紅葉も今やふかゝらん箱根路めぐりいざ君とせん
うるはしきはなの離となりにけり黄菊しら菊さきにはひつゝ

えだをりて紅葉がりせし山さとの秋をみやこの友にわかたむ
おきわたす蓬がにはのつゆごとにひかりをやどす有明のつき
かすならぬ賤がふせ家もまどかなる月は隔てずさし渡りけり
きくをめで紅葉をたゝへ學ぶ子の文かくたねのゆたかなる秋
くさ深くあれまさりゆく庭ながら虫の音のみはさやけかり幾
けぶりあひて賑はふ秋の山里は豊かなる代のしるしなるらん
こゝのへの雲るの松のかけ高くあふぐみやこの月さやかなり
さとの子はあきつおひつゝ遊ぶ也親の稻かる小田のほとりに
しら波のよせてはかへす磯やまの紅葉まばゆく夕日さすなり
すみわたる月の鏡にうつりけりそらなきわたる雁のひとつら
せきとめてやがては月もやどし見む玉より清き谷かはのみづ
そで垣のやれ間おほひてさきにけり妹が手植の糸はぎのはな

たちまよふ雲もなくしてあをそらに光かゞやくもちの夜の月
ち町田の稻かりあげて豊かなる年いはふなりをちこちのさと
つゆおきて月もやどれる草村に人まつむしのこえさやかなり
てりわたる月にむかひて故郷のむかしをしのお秋の夜半かな
ともし火のかけほの暗き窓の外の紅葉ちらして時雨ふるなり
なに波江のあしの葉末を吹きわたる風の音さむし秋の夕ぐれ
にぎはひし菊の夜市もしづまりてふけゆく空に雁ぞなくなる
ぬしやたれ盛りひさしき白菊の花のまがきのおくぞゆかしき
ねやの戸もさゝす一夜をあかしけり虫の音清く月さやかにて
のも山もきりはれわたり朝日さすあなたこなたに鶉なくなり
はひりより千くさうゑたる淺草の花屋敷にてひと日くらしつ
ひまもりて窓に吹入る秋風の身にしむばかり夜はふけにけり

ふねとめてしばしながめむこゆるぎの磯山紅葉今さかりなり
へだてなき友としたしく語りあひて紅葉を見つゝ山廻りせり
ほにいでしすゝぎが原におく露の玉ゆりこぼす風のさむけさ
まつかげの廣き園生に白菊のにはひもきよくさきいでにけり
みわたせば都の空はうちかすみ小春日よりのいとどかなり
むしの聲ひと夜ひと夜にしげくなりて秋のあはれの深き庭哉
めされつる臣のこゝろもにはふらん雲井の園の菊のうたげに
ものは皆あはれをそふる夕まぐれ雁の音のみぞさやか也ける
やなぎ原明るくなりてさびしさのいとゞ身にしむ秋の夕ぐれ
いひつくす言の葉もなし鹽原のあきの盛りの木々のにしきは
ゆめさめて燈火くらき枕邊にさびしさそふるこほろぎのこゑ
えの島も天城のみねも見えそめつ鎌倉やまにつきののぼりて

よもすがら文讀む窓の吳竹におとさびしくもふるしぐれかな
らちはやれ軒はかたぶく古寺にはこりがほにもさく野菊かな
りん時汽車今日もいでけり嵐山峯のもみちばまさかりにして
るゐをもてうゑあつめたる九重の御園の菊ぞよにたぐひなき
れんげつみて遊びし野邊も夕霧のこめて淋しき秋は來にけり
ろも權もあらぬ小舟に稻つみて曳きつゝかへる賤もありけり
わきも子がうつやきぬたの音さえて雁なきわたるあか月の空
るなか道そゞろありきに日は暮れて思はぬ里に月をめでけり
うへ野山花のみやこを見渡して紅葉のかげにかたりくらしつ
ゑめる栗みのれる柿を指さして山家のあきをほこるうなる子
をちこちの里に夜すがら聞えけり誰が爲にうつ櫛衣なるらむ

あし曳のやまの端いづる冬の夜の月かけすごし霜をてらして
いけ水のこほれる上にむつまじく夢結ふらしをしの眠ふれる
うちわたす野末の薄枯れふしておく霜しろく身にぞしみける
えだたわに雪をいたゞく櫻田のつゝみの松にあさ日さしそふ
おい人は昔かたりにふゆの夜の更くるもしらす火桶かこみて
かせ寒み池も凍りてはやおきのおちも朝いになるこゝろかな
きくは枯れもみちも散りて木枯のふく音さむし冬のやまざと
くれ竹の葉ごとにこほる霜見れば雪よりさむし肌にとほりて
けふもまたしばしいこはむ早咲きの梅が香高き岡のかりやに
こゆるぎのいその松原風さえて網ひくあまのかけだにもなし
さくら花散るがごとくに谷川のきよきながれに雪降りみだる
しもふみて門の外すぐる足音は夜ふくるまゝにさえ優りつゝ

すみ田川さをさしくだる屋形舟たがなくさみの雪見なるらむ
せきわけて導びかれゆく掛樋より溢るゝ水も今朝はこほれり
その守の心つくしゝ霜よけのまつ葉のうへにつばきこぼるゝ
たちまよふ雪げのくものたえ間より折々さごく月のもりくる
ちりのこる枝もありけり木がらしの風をのがれしたにの紅葉
つひにまた今年も暮れぬ新しき年のそなへもとゝのはぬ間に
てにとらばやがて消えなむ冬枯の枝に咲きたる霜のはつはな
ともし火のかげまばらなり家ごとに冬は窓の戸早くとざして
なに事もおくれがちなるわが門に春まちあえず梅ぞにほへる
には草はのこらす枯れて霜ふかきまがきにほふ水仙のはな
ぬは玉の夜や更けぬらむ夜鷹そば賣りゆく聲の空にさえゆく
ねやの戸は固くとざせど小夜更てすき間もりくる風の冷たさ

の。る。汽。車。の。窓。の。中。に。も。吹。き。入。り。て。寒。さ。い。や。ま。す。越。の。し。ら。ゆ。き
は。ま。川。の。つ。ゝ。み。を。渡。る。風。寒。む。し。あ。し。の。枯。葉。に。お。と。を。た。て。つ。ゝ
ひ。と。は。皆。寝。し。づ。ま。り。た。る。う。し。み。つ。の。閨。の。と。寒。く。時。雨。降。り。來。ぬ
ふ。き。さ。そ。ふ。風。だ。に。な。く。ば。紅。葉。の。ま。だ。散。り。の。こ。る。枝。も。あ。ら。ん。を
へ。だ。て。な。き。昔。の。友。と。か。た。り。つ。ゝ。木。の。芽。煮。な。が。ら。雪。を。見。る。か。な
ほ。ま。れ。を。も。と。み。を。も。い。は。ず。冬。は。た。ゞ。火。桶。一。つ。ぞ。老。は。こ。ひ。し。き
ま。帆。か。た。帆。入。り。く。る。あ。ま。の。舟。に。さ。へ。つ。も。り。て。嬉。し。今。日。の。初。雪
み。む。人。も。な。き。山。か。げ。の。い。ほ。な。が。ら。梅。こ。そ。か。を。れ。冬。の。う。ち。よ。り
む。ら。時。雨。あ。ら。れ。ま。じ。り。に。降。る。音。は。骨。身。に。し。み。て。淋。し。か。り。け。り
め。さ。む。れ。ば。静。ま。り。は。て。し。閨。の。戸。に。音。幽。か。に。も。散。る。木。の。葉。か。な
も。み。ち。葉。は。皆。散。り。は。て。ゝ。木。が。ら。し。の。枝。ふ。き。は。ら。ふ。音。の。淋。し。さ
や。ま。に。尾。に。降。り。つ。も。り。た。る。此。の。雪。を。都。の。友。と。な。が。め。て。し。が。な

い。た。ひ。さ。し。あ。ら。れ。た。ば。し。る。音。の。し。て。夢。も。圓。か。に。結。び。か。ね。た。り
ゆ。ふ。か。ら。す。ね。ぐ。ら。定。む。る。う。ぶ。す。な。の。森。を。な。ら。し。て。木。枯。の。ふ。く
え。だ。な。ら。す。風。も。な。き。夜。と。思。ひ。し。に。今。朝。は。雪。こ。そ。降。り。積。り。け。れ
よ。ひ。の。間。は。し。ぐ。れ。て。み。え。し。大。そ。ら。に。さ。え。て。の。こ。れ。り。有。明。の。月
裾。野。ま。で。雪。の。つ。も。り。て。ま。白。な。る。不。二。の。根。寒。む。し。三。保。の。松。ば。ら。
筑。葉。山。み。ね。よ。り。お。ろ。す。か。せ。さ。え。て。利。根。の。川。瀬。に。千。鳥。な。く。な。り。
あ。た。ゝ。け。き。朝。日。を。う。け。て。う。め。か。を。り。鶯。な。か。む。は。る。ぞ。ま。た。る。ゝ。
梅。咲。か。ば。つ。げ。ん。と。い。ひ。し。月。の。瀬。の。と。も。の。音。信。ま。た。れ。こ。そ。す。れ。
橋。立。の。ゆ。き。の。な。が。め。に。く。ら。べ。見。む。ま。た。來。む。秋。の。月。の。よ。き。こ。ろ。
わ。た。し。舟。呼。ぶ。人。も。な。し。夕。ぐ。れ。の。淋。し。き。そ。ら。に。み。ぞ。れ。降。り。き。て
る。づ。ゝ。に。も。緋。飾。り。し。て。若。水。を。汲。む。べ。き。と。し。の。は。じ。め。を。ぞ。ま。つ
う。き。雲。は。お。ほ。か。た。は。れ。て。さ。し。わ。た。る。朝。日。ま。ば。ゆ。し。不。二。の。白。雪

